
彼のゴール

リン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼のゴール

【コード】

N8033S

【作者名】

リン

【あらすじ】

「彼」は様々な想いに囲まれています。当然、「彼」には見えていないところにも想いは溢れています。明るく、厳しく、楽しく、切なく、様々なかたちで、それらの想いは「彼」に届くことでしょう。「彼」はその想いを受けて成長し、想いとは何か、悩むことになりました。悩んだ末に彼が出した答えとは……？

個々の心理に重点を置いた、ごくありふれた日常の物語です。何気ない一言でも、大きな想いが込められているのかも知れません。

始まりの言葉（前書き）

幅広い意味での自身の能力を客観的に知りたいと考えています。視点がわかりにくい場面もあるかと思いますが、心理描写と感情移入ということに重点を置いた結果、このかたちに致しました。少しでもお目通しを頂けた方、一言の感想をぜひお願い致します。認めて頂けた部分は心の支えに、指摘を頂いた部分は今後の自身に、活かしていきたいと考えております。

始まりの言葉

彼は言った。

「大きくなったら僕と結婚しよう」

何を見て何を感じてその言葉が彼の小さな口から発せられるのか。小学校に上がりたての幼さがいっぱいに溢れた彼のその姿は、滑稽でありながら、見る者を思わず微笑ませるような可愛らしさすら兼ね備えている。結婚とは何なのか、それを申し込むことが何を意味するのか、そんなことはほとんど解りもせず思わず言ってしまった。そしてすぐに後悔した。彼の心は一瞬で羞恥と悔恨に満たされた。

当然のように、翌日から彼はクラスの話題の中心に登場した。その会話の輪の中に彼がいるはずもないが、飛び交う自分の名と嘲笑は嫌でも耳に入ってくる。誰にも聞かれていないはずなのに、誰もが知っている昨日の出来事。考えたくはないが、その理由は一つしかない。そして彼は、自分の中から一つの感情が薄れていくのを感じる。今更無駄なことだとは心のどこかでわかつていながらも、自分の浅はかさを今一度責め、あれほどの心の昂ぶりと行動力がなぜ生まれたのかを確認するように、自分の行動を何度も何度も振り返る。答えは最初からわかっているのに、それでも考えずにはいられない。しかし、いくら考えても周りの声が消える訳でもなく、彼は耐えるしかなかった。

それは波のように

香織は戸惑った。小学校に入学して一週間も経たないうちに、同じクラスが目立たない彼に呼び出された。そして彼は言った。

「大きくなったら僕と結婚しよう」

時間が止まる。暖かな日差しも、爽やかな風も、遠くで聞こえる可愛らしい笑い声も、香織は感じない。永遠のような一瞬。香織自身、事態がよくわからない。別に大して格好良い訳でもなく、よく知りもしない彼に突然そんなことを言われても困る。返事は決まりきっている。色々考えたはずだが、時間にして一秒足らず。幼さゆえか、彼の気持ちなど考えもせず、一言で事態は終結した。

「嫌」

香織は友人に会ったびにあの話をした。

「彼に結婚しようって言われたんだよー」

「彼は香織のことが好きなんだあ」

友人達は皆一様に囁し立てる。とても気分が良い。

翌日、香織は得意になつて彼に言った。

「私のこと好きなんですよ」

彼は何も言わないし、香織の顔を見ようともしない。香織は彼のその態度に苛立った。

「私と結婚したいんですよ？考えてあげてもいいよ」

それでも彼は何も言わないし、香織の顔を見ようともしない。香織の方から声をかけてあげているというのに。香織はむきになって、次の言葉を続けようとした。その瞬間、

「お前なんか好きじゃねえよっ！」

と彼が言った。確かにそう言った。結婚しようって言ったくせに。アンタの方から言ってきたくせに。

「私だつてアンタなんか大っ嫌いよっ！」

香織は彼に言い放った。

経験という名の「成長」と「傷跡」

彼は月日とともに痛みから解放された。幼さゆえにあの感情の本質を知らなかったことが幸いし、浅い傷で済んだ。そして、長い年月をかけて、その痛みを忘れていった。

長い年月の中で、様々な人間を見て、様々な価値観に触れ、彼は成長した。そして、彼は気付いた。小学校最後の年にして再び、自分の中にいつかと同じ感情が芽生えていることに。気になり始めると考えることは止まらず、考えれば考えるほど気になって仕方がなくなつた。今ならわかる。なぜ、この感情が自分の中にあるのかということが。そして、この想いは伝えなければならぬということ

が。
考え抜いた末に、彼は想いを伝えるべき相手を誘い出した。しかし、いざ対峙してみると口が開かない。最初の言葉から、一番言いたいことを言うまでの言葉、全てをひとつひとつ考えてきたはずなのに、言えない。相手が自分の言いたいことに感づいているのは顔を見ればわかる。それでも、黙つてこちらが口を開くのを待っている。

それでも、言えない。

何も、言えない。

言葉もなく、時間だけが動いてゆく。

長い沈黙に耐えられなくなつたかのように相手がそわそわし始める。相手がすぐにでもこの場を離れたがつていることが容易に感じ取れる。そして、もう時間に後がないということもわかる。今しか

ない。彼が意を決したその瞬間、一つの映像が頭の中を過った。

あの後何を言ったのかは思い出せないが、くだらない話をしたことと、安堵と失望の入り混じったような相手の顔だけはしっかりと覚えている。そして彼の心には羞恥が生まれなかった代わりに、喪失感と後悔が残った。

それはなぜ？

美穂は困惑していた。呼び出しておいて何も言わない彼の態度に彼は目立たないけど優しく、前から気にはなっていた。だから呼び出された時は告白されるのかと思っただけで、さつきから彼は何も言わない。もし告白されたらどうしよう。好きなのはよくわからないし、学校で噂になるんじゃないかな。なんだか照れくさい。二人きりで話しているこの場面を誰かに見られたらどうしよう。まだ私たちは付き合ってもいないのに。もう耐えられない。美穂は沈黙を破る言葉を選ぶ。(何も用事がないならもう行ってもいいかな?) そう美穂が言おうとした瞬間、彼が口を開いた。そして、趣味のゲームのことを楽しげに話す彼を見て、どきどきしていた自分が馬鹿らしくなってきた。期待していた言葉を彼は言わないと悟り、彼の話を楽しんだ。

一人、帰り道を歩きながら美穂は考えていた。彼は何でわざわざ呼び出してあんな話をしたんだろう。しかし、いくら考えても答えは出なかった。

夢のような時間

彼は中学校に入り、あの感情とは離れた生活をしてきた。夢中になれるものを見つけたから。部活動で一心に陸上競技に打ち込む日々の中で、気の合う仲間もできた。次第にあの感情のことも考えなくなっていくた。しかし、彼を逃がさないとも言うかのように、仲間との会話の話題にはあの感情が溢れ出していた。

彼は異性と付き合うということに興味を持ち始め、その関係に憧れた。そして、毎日のようにそのことについてあれこれ想像するようになった。

その相手は程なくして見つかった。同じ部に所属していることがきっかけというのにはありがちだが、生活の中で共有する時間が長いことから、人柄を知る機会もそれだけ多い。陸上競技部は種目別の練習時間があり、走り高跳びの先輩はいないために、その時間は由美と二人での練習になるから尚更だ。由美は気配りができて、ちよつと抜けているところがあり、一緒にいると安心する。とは言っても、彼の一方的な想いで、相手の気持ちはわからない。かといって、すぐに想いを伝えれば良いという単純なものではないということとは十分にわかっていた。そして、何より失敗を恐れていた。成功したことがないことに挑戦するのを恐れるのは当然なのだから。過去二度の失敗は彼を慎重にさせた。しかし、そんなことなどお構いなしに、彼の想いはどんどん大きくなっていった。そんなジレンマに悩みながらも、由美と時間を共有できる部活動が彼のバランスを保っていた。

望みを通じたのか、転機はやってきた。二年生になって、新たな環境にも慣れた頃。夏の始まり。汗だくになりながらいつものように部活動に打ち込んでいると、由美に声をかけられた。今日の帰りに少し時間をもらいたいと。彼はその後、部活動どころではなくなつた。

待ちわびた部活動終了を迎え、由美との約束の場所へ向かう。自然と笑みがこぼれてしまう。校舎裏のひっそりとした空間には、彼の想い人がすでに待っていた。そして由美から受け取ったのは、期待していた言葉ではなく一通の手紙だった。キャラクターの絵が微笑ましい封筒に、ハートのシールで封をしてある。それを彼が受け取ると由美は言った。

「家に帰ってから開けて」

彼ははっとした。この状況はいつかと似ている。言いたいことが決まっているのに、一生懸命考えてきたのに、何も言えなかったあの時だ。呼び出しておいて手紙を渡すだけというのは最初は不思議だったものの、自分の過去を思い出して納得がいった。

帰り道、仲間達は彼を冷やかした。

「誰と会ってたんだよ」

「告られたのか？」

彼はまんざらでもない気分でただにこにこしていた。家に着くと、律儀にも開けずに持ち帰った封筒を手に、誰にも邪魔されない場所へ行った。何が書いてあるのかは予想できている。にも関わらず、期待に胸を躍らせ、自分の鼓動が聞こえている。ハートのシールをはがす。封筒が破れないように、丁寧に、丁寧に。中には可愛らしく折りたたんだ便箋が入っている。後で元に戻せるように、折り方を確認しながらゆっくりと開いてゆく。キャラクターがキスをしている絵が透けて見えてくる。文字も透けているが内容はまだ確認しない。そして最後の折り目を開く。

「好きです。私のことどう想ってるか聞かせて下さい。もしよかったら付き合ってください。お返事待ってます。」

憧れの彼

今日も部活動の時間がきた。佳代は、彼が見られるこの時間が大好きだった。自分も活動をしながら、彼の姿を眺める。佳代は短距離、彼は走り高跳びと、種目が違うために練習メニューも別で、練習中に会話することはない。しかし、佳代は言葉は交わさなくても見ているだけで十分だった。親友の由美は彼と同じ種目だから一緒に練習している。帰り道で由美にその日の彼のことを聞くのが、佳代は楽しみだった。本当は自分が彼と話せたらもつと楽しいだろうなとは思いつつも、いざそうなったら何も話せないような気がするから、それで良かった。

ある日、突然由美が好きなヒトができたと言いだした。佳代が誰なのか聞いても、いつも何でも話してくれる由美がこれだけは秘密と言つて、教えてくれなかった。佳代は自分の好きなヒトを由美に伝えているだけに、意外だった。ただ、最近そのヒトと良い雰囲気だということは話してくれた。由美とはクラスが同じだけれど、そんな素振りを見せなかったから相手が誰なのか全く見当もつかないでも、由美の気持ちを応援したい。佳代にも想うヒトがいるからわかる。由美の気持ちを知つて、佳代は少し勇気をもらった。親友が同じように悩んでいる。いつも自分に彼のことを話してくれて、自分を応援してくれていた由美。自分も由美の力になりたい。今度は自分が応援する側になる。一緒に悩んで、励まし合つて、二人とも素敵な恋ができるといいな。佳代は由美に自分の気持ちを話した。そして想いを伝えることを勧めてみた。佳代のように会話もできない状態ではなく、良い雰囲気ならそうするべきだと。でも、由美は煮え切らない。何か背中を押してあげられる方法はないものかと考え、ふと佳代は言つた。

「私が先に彼氏つくっちゃうぞ」

由美はそれを真に受けたのか、大賛成して、彼に想いを伝えること

を急に勧め出した。佳代は慌てて冗談だと言ったが、由美は聞いてくれない。そんなやり取りをしているうちに佳代も段々その気になってきて、恥ずかしいから手紙で想いを伝えろということ二人は落ち着いた。

同じ言葉 違う想い

由美はいつものように、帰り道で佳代に彼の話を聞かせていた。佳代は、彼が今日どんなことを言ったとか、何を聞いて笑っていたとか、そんな他愛もない話を聞いて嬉しそうな顔をする。よほど好きなのだろう。由美はそんな佳代を見るのが好きだった。

佳代と話をしていると、自分まで彼のことが好きだというような錯覚に陥る。確かにそれなりに面白いヒトで、優しいし、身長が高い自分と比べても更に高く、見た目も悪くない。一緒に練習していると、たまにすごく格好よく見えたりする……。

佳代のせいではない。彼のことをどう見ているか、ちゃんと考えてみて、自分の気持ちに気付いた。だからと言って、気持ちのままに行動する訳にはいかない。佳代の気持ちを知っている以上、佳代を裏切るようなことはできなかった。まずは佳代に話そうと、由美は決めた。

いつもと同じ帰り道。いつものように彼の話を聞いて嬉しそうに佳代が笑う。自分も彼が好きなんだと、とても言えない。散々ためらった末に、由美は好きなヒトができたと話した。当然といえば当然のことながら、相手は誰かと佳代に聞かれた。彼だと言わなければいけない。言ったら佳代はどう感じるだろう。どう言えばいいんだろう。佳代を傷つけたくない。佳代を裏切りたくない。佳代を、親友を、失いたくない。どうすればいいんだろう。答えを探す由美に、佳代は言った。

「私が先に彼氏つくっちゃうぞ」

そうだ。由美が求めた答えは見つかった。

（佳代が先に想いを伝えたなら、裏切ることにはならないよね。それで彼と佳代が付き合うことになっても後悔しない。よし。）

由美は、佳代に半ば無理やり、彼に想いを伝えるという約束をさせた。

翌日、佳代の決心が鈍ったようだったのを見て、由美は強引に勧めた。なぜそこまでするのか、由美は自身の想いが大きくなり過ぎたことに気付いていない。由美は、それが佳代のためになると本気で考えていた。佳代は恥ずかしいと言っただけで、やっぱりやめると言い出しそうだったから、渡してきてあげる、と佳代の書いた手紙を受け取った。

彼にクラブの活動中に声をかけ、帰りに少し時間をもらう約束をした。自分が告白する訳ではないからか、どきどきすることもなく誘ってしまった。今更ながら、何でこんなことをしているんだろう、と由美は後悔した。佳代に幸せになつて欲しい。それは間違いない。本心だった。自分も素敵な恋がしたい。それも由美の本心だった。何がいけなかったんだろう。佳代も自分も幸せになるのは無理なんだろう。もう後戻りはできない。逃げ出すことはできない。

由美は校舎裏で彼を待った。デートで彼氏を待つ時間って楽しそうだな、と考えて、悲しくなる。好きなひとと待ち合せているのに、待つのが辛い。遠くに人影が見える。あのすらっとした長身は彼だ。間違いない。

「ごめん、お待たせ」

何でこんなに悲しいんだろう。何でこんなに辛いんだろう。ううん、今来たところだからって笑顔で言ってみよう。でも、今はそういう場面じゃない。佳代から預かった手紙を彼に渡した。彼の嬉しそうな顔が映る。見るとほっとするはずの彼のその笑顔を見て、由美の頬を雫が伝った。夕闇に紛れ、彼は気付いていない。何もなかったかのようにしなければならぬ。自分の想いを悟らせてはいけない。佳代の想いをまず伝えなければ。彼を見る。嬉しそうに手紙を開けようとする彼がいる。

「家に帰ってから開けて」

由美はそれしか言えなかった。彼が手紙を読んだ時の反応は見たくなかった。どんな反応をしても、由美にとっては辛いことに変わり

はなかつたから。

それは誰のために

佳代は書き上げた手紙を見て、恥ずかしくなってきた。

「好きです。私のことどう想ってるか聞かせて下さい。もしよかつたら付き合ってください。お返事待ってます。」

こんなこと面と向かってはとても言えない。自分がそれを口にする場面を想像して、佳代の顔は朱に染まった。やっぱり今のままの関係でいいから、渡すのはやめよう。そう由美に伝えようとしたものの、由美の言葉に押し切られ、手紙を由美が渡してきてくれることになった。

心の奥で願っていること

彼は素直に喜べなかった。異性と付き合うことに憧れがあった。その相手として望んでいた由美から手紙を受け取った。内容もほぼ期待通りだった。差出人以外は。

佳代のことは知っている。由美とよく一緒にいるコだ。でも直接話したことはないし、全然自分に気がある素振りもなかった。由美がいたずらでこんなことをするとは思えないし、この手紙に真剣に向き合わなければならぬ。

佳代のことはそういう見方をしていなかったから、どう想うかと聞かれてもよくわからない。明るくて可愛いという印象がある程度だったが、正直に答えて良いものか。彼は悩んだ。布団に入っても頭の中は大騒ぎだった。由美が楽しそうに笑っている。それを見て彼も嬉しくなる。好きです、付き合ってください、と由美が言う。嬉しくてたまらないのに、返事ができない。照れくさくて、つい俯いてしまう。顔を上げて、俺も好きだよって言う。言えた。やっと言えた。ずっとそばにいながら言うことができなかったたった一言。

「嬉しい」

そう言っただけを染めて恥ずかしそうに微笑んでいるのは佳代だった。そんな夢なんだかよくわからない世界で同じことを何度も繰り返し返しているうちに、カーテンが白く染まり出した。佳代からの手紙を由美から受け取った。それは夢じゃない。返事はどうすれば良いんだろう。

予感があった

由美は彼に呼び出された。昨日の手紙の返事を持ってきたと。彼の顔を見て、内容は大体想像できた。

昨日と同じ場所。今日は彼が先に待っていた。「お待たせ」とは言えない。彼が差し出した手紙を、手の震えを隠すようにさっと受け取る。きつと佳代は喜ぶだろう。精一杯、彼に笑いかける。今日はこの手紙を佳代に渡したら、一人で帰ろう。由美は佳代の反応を見たくなかった。頭に浮かぶその場面を必死に振り払い、由美は駆け出していた。

どうかお願い

由美が彼からの返事の手紙をもってきてくれた。昨日渡したばかりなのに。ただ、心なしか由美の様子が暗い気がする。佳代は返事を見るのが怖くなった。やっぱり手紙なんて書かなければ良かったんだ。こんなに簡単に関係が崩れてしまうくらいなら、今までのように遠くから見ていただけにすれば良かったんだ。どうしよう。これからどんな顔をして彼と顔を合わせればいいんだろう。

「今日は私、先に帰るね」

由美が言った。気を遣ってくれている。佳代は余計に返事が怖くなった。とても一人では見られない。一人で帰ろうとする由美を引き止め、一緒に見てくれるように頼んだ。それでも一人で帰ろうとする由美に、佳代は泣きそうになりながら必死でお願いし、半ば無理やり由美と一緒にいてもらった。

封筒はお茶目なキャラクターの可愛いものだった。ハートのシールで封がしてある。佳代が使ったものの色違いのものだった。彼がそういうレターセットを持っているとは思えないから、きつとわざわざ探して買ってきたんだろう。今にも壊れそうなものを包み込むように、佳代はその封筒をそっと抱いて胸に当てた。祈るような気持ちで、ハートのシールにもう一度目をやる。そっと由美を見る。由美はこっちを見ていない。心臓の音が聞こえる。からだが震える。見てわかるほどに、手紙を持つ自分の手が揺れている。佳代は大きく息を吸った。

「開けるね」

聞こえるかどうかの精いっぱい震える声で佳代は言い、ハートのシールをそっとはがした。

手に入れたもの 失ったもの

彼は返事を書くことにした。由美への想いは消えない。そして、異性と付き合うということへの憧れも。彼の由美に対する想いは、未知への期待のもとで、押さえ込まれた。

由美に声をかけ、昨日待ち合わせた校舎裏へと呼び出す。今日は彼が、手紙を持って先に待っている。少しどきどきするが、相手の気持ちが見えているために怖くはない。程なくして校舎裏へやってきた由美に、書いてきた手紙を渡す。由美はにっこりと微笑み、彼が渡した手紙を持って、小走りで行った。好きだった由美の笑顔を見て、なぜか胸が苦しくなった。いつもあの笑顔を見ると安心していたのに。

居場所

彼と佳代は付き合い始めた。由美はそれをいつも間近で見ているわけばならなかった。付き合っていることを公にするのは恥ずかしいらしく、手紙でのやりとりをしているからだ。佳代に頼まれて、由美は手紙の配達員のようになった。確かに、こうしていれば彼と佳代が付き合っていることは隠し通せるだろう。彼と佳代は直接会話もしないし、二人でいることもないのだから。由美は、自分の想いは届かないまま、そんな関係を維持するために彼の近くにいなければならないことが辛かった。

「いつも、悪いな」

彼が言う。その言葉を耳にするたびに。そのはにかんだ顔を瞳に映すたびに。そのヒトと二人きりになるたびに。由美の胸は、ただ、痛み続けた。

幸せな決意

付き合っていることを隠すために、手紙でやり取りをしている。佳代は、彼と付き合えることは嬉しかったが、公にするのは恥ずかしかった。悪いことをしている訳ではないのに、なぜか、隠したくなってしまう。ただ、そのために由美を間に立たせてしまっていることが申し訳なかった。自分は素敵な恋にたどり着いたけれど、由美はどうなっているんだろう。何も聞いていないから、きっとまだ進展はしていない。いつまでも自分を支えてもらってばかりではない。いつまでもこのままではいけない。早く彼とちゃんと話せるようになって、今の状況を克服するんだ。そうしたら、今度は、精いっぱい由美の力になりたい。

近くて遠い恋

二日に一往復程度のペースで手紙のやり取りをした。佳代からの手紙を由美が持つてくる。佳代は、付き合っていることを公にするのが恥ずかしいらしい。そんな風に言われると、彼まで恥ずかしいような気がしてきた。結局、間に立ってくれる由美に甘え、こんなやり取りが続いている。

「いつも、悪いな」

佳代からの手紙を届けてくれる由美に彼は言う。佳代と付き合い合っはいても、由美への気持ちが変わる訳ではなく、二人きりで会うとどうしてもはにかんでしまう。由美の笑顔を見るとほっとする。それは今でも変わらなかった。

佳代と付き合い始めて二月ほど経った。クラスも部活動も同じ祐一に誘われて、数人の仲間達と遊びに行った。雑談を交わしていて、彼は耳を疑った。

「昨日佳代がデートしてたぜ」

「佳代って結構可愛いと思ってたんだけどな」

「相手は誰だったんだ？」

「そこまではわからんけどあれは絶対男だった」

彼の耳には他の言葉は届いていない。何だっ？何度疑問を繰り返しても、彼の耳には同じ言葉が木霊する。

「昨日佳代がデートしてたぜ」

泥沼

彼と付き合い始めて一月半ほど経った。手紙のやり取りに慣れ、彼から届くのが待ち遠しい。直接話したいな、と思いつつも、想像してみるとやっぱり恥ずかしい。家に帰って部屋で手紙を書いてみると、同じ部の祐一から電話がきた。

頭の中が真っ白になった。告白されたことなど初めてで、佳代はどうして良いのかわからない。祐一は通話口で返事を待っている。どれくらい黙っていたらろう。祐一に聞かれた。

「付き合い合ってるヤツとかいるの？」

佳代はつい、肯定した。すると、相手は誰なのかとしつこく聞かれた。それを聞いたら諦めるからと言われ、佳代は仕方なく彼だと話した。皆に秘密にしているからと強く口止めをして。そして、佳代は自分の甘さを後悔した。

「黙ってるからさ、一回だけ付き合い合ってよ」

本気だからこそ

由美は嬉しかった。今日は朝から雨で、一日憂鬱だったけれど、その帰り道。佳代がデートの約束をしたと言うので、やっと直接彼と話せるようになったのかと、少し気が楽になった。最初は郵便屋を請け負うのが毎日辛かったけれど、今ではやっと佳代を応援する気持ちも保てるようになってきた。これからは彼と佳代が自分の知らないところで話をすると思うと複雑な気持ちもある。それでも、これでやっと胸を張って自分の気持ちと向き合えると思うと、胸につかえていた何かが取れた気がする。

「どこに行くの？いいなあ」

「・・・彼とじゃないの」

「はっ？」

思わず声に出た。苛立ちも隠せなかった。笑みが顔に張り付いたまま戻らない。ああ、違う。こんな態度はいけない。佳代はそんなコじゃない。絶対に何か理由がある。自分が力になってあげなきゃ。

一番苦しんでいるのはきつと佳代なんだから。

「冗談じゃないよね？」

由美の顔には笑みが張り付いたまま。声は震えている。持っていた傘が手から落ちる。佳代は黙って俯いている。

「そう、なんだ……」

由美はそれ以上言葉を紡げなかった。頬を濡らしているのが雨ではないことに二人とも気付かないまま、揃って立ち尽くした。心を映したような空は、一層暗く淀んでいった。

その沼はどこまでも深く

約束の日。佳代は、結局祐一との待ち合わせの場所へ行つた。祐一がにやにやしているのが気持ち悪い。今まで気にもならない普通の笑顔だったはずなのに、今はそう見える。自分は何をやっているんだろう、と虚ろな佳代の瞳に信じられないものが映った。祐一の手が自分の手に迫っている。少しずつ、コマ送りのように、近づいてくる。佳代にはそう見える。嫌だ。まだ彼ともつないでいないのに。佳代は慌てて手を引いた。

「恥ずかしいから」

そう言つて祐一との距離を空けた。佳代は、一緒にいるのが一層嫌になつた。

「どこか行きたいところはある？」

「・・・帰りたい」

「はは、ユーモアもあるんだね」

冗談ではない。笑えない。本気で帰りたい。にやにやしないで。何でこんなことになつていいるんだろう。

結局、近くの喫茶店に入り、頭痛を理由に帰つてきた。由美はあれから親身になつて相談にのつてくれた。それでも、こうなつた。彼とは直接会話もしないのに、他の男とデートするなんてどうかしている。何で断れなかつたんだろう。答えはわかっている。でも、認めたくない。自分の弱さ。彼に想いを寄せながら、他のヒトから告白されて、どこか舞い上がっていた自分がいる。悪い気はしなかつた。相手のことを意識したことなんてなかつたのに、好きだと言われて、悪い気はしなかつたんだ。自分の気持ちに伝えてくれた彼に、合わせる顔がない。それとも、彼もそうだったんだろうか。何とも思つていながつたのに、好きと言われて付き合う気になつたんだろうか。怖い。彼を信じたいのに。気持ちを確かめたい。もっと早く、勇気を出して、話せる距離にいれば良かった。彼に謝ろう。

正直に話して、ちゃんと謝ろう。

翌日、学校は休みだったから佳代は手紙を書いていた。明日、ちゃんと会って彼と話すんだ。昨日のことを、正直に。想いを込めてただ一言。「会って話したいです」と手紙を書き上げた。その時、彼から電話がきた。

「・・・昨日つて何してた？」

佳代は言葉が出なかった。彼は知っている。まだ話していないのに、間違いなく昨日の出来事を知っている。由美が言うはずはない。他に知っているのは一人だけ。佳代は改めて自分の行動を心の底から後悔した。今更、祐一の考えに気付いた。

誰のせい

彼は居ても立ってもいられなかった。佳代に直接聞いて確かめたい。手紙だけではきつと納得できない。何より、今日は学校が休みなのだから、明日までなんて待つていられない。彼は意を決して、佳代に電話をかけた。

「・・・昨日って何してた？」

聞きたいことは山ほどあるのに、それ以上何も言えない。佳代も何も言わない。しばらく沈黙が続いた後、佳代が泣きながら話し出した。佳代が悪い訳ではない。最後まで話を聞いて、そう思った。ただ、相手が誰なのか聞いても答えない。言ったら何かまずいことがあるんだらうか。このやり場のない怒りは何なんだらう。彼はその怒りを抑えながら、佳代と会話を続けた。やっと、電話越しではあるけれど、やっと、会話ができた。佳代との関係を壊したくない。その一心で、彼は怒りを抑え通した。

誰かの幸福と誰かの不幸

景子は親友の真紀子に頼まれ、祐一を誘って遊びに行く計画を立てていた。真紀子が一方的に祐一に想いを寄せているだけで、二人は付き合っただけではない。

「任せておいてよ」

二人きりでのデートは恥ずかしいと真紀子が言うので、景子も行くことになっている。引き受けたものの、気は進まない。デートに三人目などいたら、本人達にとっては邪魔になるだろうし、三人目は居心地が悪いに決まっている。引き受けなければ良かったな、と考え込んでいたら良い案を思いついた。早速、祐一に声をかけた。

「今度遊びに行こうよ。四人くらいでどうかな。私も女子をもう一人連れて行くから、男子をもう一人誘っておいてね」

日常の景色

佳代と電話で話してから、一月ほどが過ぎた。夏の暑さは去り、学校の周りの山々を見る者を楽しませている。彼はぼんやりと窓の外景色を眺めながら、佳代のことを考えていた。相変わらず、手紙でのやり取りは続いている。佳代はあの時の電話で落ち着いたように、そうなるかと顔を合わせるのやはり恥ずかしいらしく、結局、それ以来会話はできていない。彼はあの電話だけでも嬉しかったので、佳代の気持ちを汲むことにした。

ふと教室に視線を戻すと、祐一が何か合図を送っている。数学の教科担任は、授業進行の邪魔さえしなければ細かいことを色々言わないので、祐一のように軽くふざけたりする生徒が多い。そんなことばかりやっているからほとんど解らなくなるのに、と彼は余計な心配をしながら適当に流している。しかし、今日はやけにしつこい。いつまでも必死に指差す方向に目をやると、丸めた紙が落ちてくる。彼は理解した。あれは手紙のようなものだ。授業中に何か伝える時は、ああして用事を書いた紙を丸めて、相手の近くへ放る。先生に見つかれば当然取り上げられるのだから、祐一も必死だったという訳だ。そういえば、前に先生の似顔絵の横にアヒル先生と書いた紙を取り上げられて、職員室に呼ばれていた。祐一も懲りないなと思いつつ、彼も退屈していたので紙を拾う。

「四人で遊びに行くぞ。週末空けておけ」

楽しいデート

真紀子は興奮して眠れなかった。明日はついに祐一とデート。友人の景子にセツティングを任せただから、景子も来る。途中で帰ってもらうつもりだったけれど、予定変更。祐一の友人である彼も来るらしい。わざわざ男子を増やしたくらいだから、景子と彼をくっつけて別行動にすれば角も立たない。明日が待ち遠しい。

翌日、カラオケボックスに入った真紀子は楽しくて仕方がなかった。祐一の隣に座り、好きな歌を祐一と歌う。景子を見ると、彼に何かを耳打ちしている。余計な気を遣わなくても勝手にくっつきそうだった。

朝から夕方まで、結局ずっと四人でいたけれど、祐一との時間を満喫できて真紀子は幸せだった。今日の感じなら、祐一は遠からず落とせるはず。本当は家まで送ってほしかったけれど、祐一はすぐに帰ってしまった。きつと用事があったんだろう。真紀子も帰ろうとすると、彼が言った。

「時間も遅いし、送ろうか？」

笑わせてくれる。ここまで下心が見え見えだと引いてしまう。当然断ろうとしたところで、思い直した。景子はもうその気になっているし、真紀子が断っても彼は景子を送っていくだろう。真紀子が祐一に送ってもらえなかったのに、景子が二人きりで帰るといのは癪だ。真紀子は、景子と一緒に家の近くまで送ってもらうことにした。

それが輝くほど周りは陰り 周りが霞むほどそれは際立つ

景子は、祐一を誘ったことを真紀子に伝えた。祐一は同じ部の彼を誘うと言っていたから、彼も来るということも真紀子に話した。

それを聞いた真紀子は本当に嬉しそうにお礼を言ってくれた。親友にここまで感謝されると一肌脱いだ甲斐がある。真紀子は本当に祐一のことを好きなんだろう。自分もそんなヒトを見つけない、と明日来る彼のことを思い浮かべた。

彼とはクラスが違うが名前は知っていた。陸上競技部で走り高跳びをやっていて、二年生になってからは大会があるたびに入賞して何度も学校集会で表彰されていたから覚えている。明日は楽しく過ごせるといいな、そんなことを考えながら景子は眠りについた。

翌朝、景子は一時間以上かけて支度を済ませた。何度も鏡の前に立ち、着替えを繰り返した。自分の顔とにらめっこしながら初めて化粧をした。そわそわして家にいられなかったから、予定より一時間も早く待ち合わせ場所に着いてしまった。約束の時間の五分前に彼は来たけれど、待たせたことを景子に謝った。祐一と真紀子は遅れてきたけれど、何も言わなかった。

四人でカラオケボックスに入ると、すぐに祐一は何を歌おうかと選び始め、真紀子はその隣に座り祐一に話しかけていた。景子がその向かいに座ると、彼は少し距離を置いて座った。彼の態度は紳士的だった。景子はしばらく考えて、彼の隣に座り直した。彼が席を立とうとするのを引き止め、耳打ちした。

「実は、今日真紀子が祐一に告白するつもりなんだ。協力してもらえないかな」

彼はなるほどといった感じで引き受けてくれた。その後ちらちらと彼に目をやったが、機嫌が悪そうだった。祐一と真紀子のためにダシにされたとなれば、面白くないのは当然だろう。自分でこの役を引き受けた景子でさえもそう感じていたのだから。彼の気持ちを考

えたら、楽しもうという気持ちは景子の中から消えた。ご機嫌に歌っている祐一も、楽しそうにはしゃぐ真紀子も、自分の気持ちなんてこれっぽっちも考えてはいないだろう。居心地が悪い。歌どころじゃないよ。

結局、彼も景子も一曲も歌わなかった。夕方まで四人で遊んだはずなんだけれど、午後は何をしたんだっけ。日記を付けながら景子は今日を振り返る。そういえば、彼はずっと細かいところに気配りをしてくれていたな。朝からそうだった。彼のことを思い浮かべてあれこれ空想しているうちに、景子は彼のこと気がなくなって気になつて仕方がなくなつていった。

先に後悔することはできない

出かける準備がちょうど済んだところで、彼は祐一からの電話を受けた。

「悪い、ちよつと遅れるわ。女子が二人待つてるはずだから、伝えておいてくれよ」

「は？ちよつと待て！聞いてな……」

祐一はいつもそつだ。自分の言いたいことを言ったら用事が済んだと思つてゐる。当然、もう電話は切れた。しかし、今問題なのはそんなことじゃない。女子が二人待つてゐる。確かに祐一はそう言つた。手紙でそんな話はしていないから、佳代ではないのは間違いない。行くのをやめたいところだけれど、祐一は時間に対してだけでなく性格がルースだから、平気で一時間以上遅れたり、下手をすれば、行くのを黙つてやめてしまふかも知れない。それでは二人の女子があまりにも可哀想だ。彼は仕方なく、祐一が遅れるということだけ伝えたら帰ることにした。

待ち合わせの場所に着くと、隣のクラスの景子がいた。小学校から知つてゐる顔ながらも、会話した記憶はない。

「待たせてごめん」

彼はまず謝つた。約束の時間にはまだ早かつたとはいえ、男子が女子を待たせるのはどうかと思う。もう一人はまだ来ていない。祐一が遅れることを伝えると、景子はもう一人の女子、真紀子のことを話し出した。真紀子のことは少しだけ知つてゐる。佳代の友達で、ごくたまに手紙で話題に現れたコだった。直接顔を合わせたことはなかつたが、景子の話を聞く限りでは祐一と性格が似ているということはわかつた。そんなどうでもいいような情報を得た代わりに、彼は帰るタイミングを失つてしまった。

とりあえずカラオケボックスに入ることになった。祐一の隣に真紀子が座つたのを見て少し羨ましく思えた。まだ佳代とは近くで会

話したこともない。クリスマス頃には、手くらくらいつないでくれるのかな。少しため息を吐きながら、景子が座るのを待ち、距離を置いて腰を下ろした。どうやって抜け出そうか、そんなことを考えていると、祐一に腹が立ってくる。この状況はまずい。知らなかったとはいえ、佳代に内緒で他の女子と遊んでいることになる。カラオケ代を渡して帰ろうと思ったら、景子が隣に座った。余計にややこしいことになる前に帰らなければ、と急いで立ち上がると、景子に引っ張られ、椅子に腰を落とした。

「実は、今日真紀子が祐一に告白するつもりなんだ。協力してもらえないかな」

景子が耳打ちしてきた。それなら祐一と真紀子を残して帰ってしまえば済む。祐一に、先に帰る、と声をかけると、

「ここ出るまでくらい付き合えよ」

彼は時計を見る。何度見ても午後七時を過ぎている。空には夕焼けも見当たらない。

「いやあ、楽しかったな！また遊ぼうぜ」

祐一は言いながら帰っていく。無駄だとわかつていたので、彼はもう声をかけない。手だけ振って振り返ると、真紀子も帰ろうとしている。こんなに暗くなるまで女子を連れ回しておいて、何で祐一はさっさと帰れるんだ。

「時間も遅いし、送ろうか？」

彼は二人に言った。

家に着く頃には午後九時近かった。もう佳代に電話できる時間帯じゃない。いや、今更電話をかけたところで何を話すというのか。帰ることはできたはずだった。それこそ、祐一から電話がきたところで行くのをやめることもできたんだ。そんなことはわかっているのに、次から次へと言い訳が頭を飛び交う。

(女子が来るなんて知らなかったんだから仕方ない)

(何度も帰ろうとしたんだ)

(祐一が、ここまででいいから、次で最後だから、そんなことを言い続けたせいで)

きりが無い。全部言い訳なんだ。佳代が誰かとデートしたと聞いた時の気持ちも忘れたのか。

(俺は二人きりじゃなかった)

それなら、佳代が同じことをしても許せるというのか。

(俺は自分からそうしたんじゃない。知らなかったんだから仕方ない)

行く前にわかっていた。それでも行つた。

(祐一が遅れると言うから、それを伝えなければならなかった)

そうだとしても、すぐに帰ることができたのに、帰らなかった。

(タイミングがある。ただ帰ればいってもんじゃない)

佳代は途中で帰って来た。

(！)

そうだ。佳代はずっと苦しんで、それでも、途中で帰って来たんだ。自分はどうなのか。言い訳に甘えて結局最後まで遊んで帰ってきたのではないのか。そう。言い逃れなどできない。佳代に対して大きな不安と怒りを感じたあの時。あの時の逆のこと、いや、それ以上かも知れないことをやってしまった。何にしても、佳代と話さなければ。自分のしたこと、想い、全てを正直に。

全て計算通り

こんな時間に電話？真紀子は相手に心当たりが見つからないまま、電話に出た。

「あ。祐一だけど。今日楽しかったね」

落ちた。真紀子はすぐにそう思った。自分がその気になれば、当然なんだけれど。これから先は、デートも二人きり。もう祐一は自分のもの。

「実はさ、あいつら付き合っみたいでさあ」

彼と景子のこと？そんな話は聞いていないけれど、今日の様子を見れば不思議じゃない。

「いいよなあ。俺らも付き合っちゃう？なんてね」
チャンス。

「えっ、本気にしちゃうよ」

「いいの？じゃ、付き合ってよ」

来た来た。予想通り。後は次のデートの約束をして……

「いやあ嬉しいな。俺これから友達んとこに電話しちゃおっと。真紀子も友達に話してくれよ。俺、みんなに真紀子を自慢したいからさ。んじゃ、また学校でな。おやすみ」

真紀子は、明日学校へ行くのが楽しみになった。皆に聞かせてあげなくちゃ。

気持ちは裏腹に

彼と電話で話してから、一月以上過ぎた。あれから祐一は何も言っていないし、彼とは元通りに手紙のやり取りができています。朝のクラスタイムまではまだ時間がある。佳代は、便箋を取り出し、今日は何を書こうかと想いを馳せる。ふと、教室が盛り上がったことに気が付き、その一角へ目を向けた。真紀子を中心に女子が集まっている。しかし、佳代の目に映っていたのはその向こう側、廊下で手招きをしている彼の姿だった。勢いで顔を逸らしてしまった。視線だけを向け、もう一度彼を見やる。間違いない。真っ直ぐに佳代を見ている。彼が会いに来てくれた。

(嬉しい！)

(でも恥ずかしいよ)

(せっかく来てくれたのに)

(でも付き合ってることは秘密)

(出て行ったらみんなにばれちゃうよ)

佳代はもう、頬が真っ赤だった。来るならそう言っておいてくれな
いと心の準備ができない。言っておいてくれたとしても、頬が染ま
るのは結局同じだったかも知れないけれど。佳代は、もう彼を見ら
れなかった。彼と視線を合わせないようにして、盛り上がっている
女子の輪へと入って行った。

とても素敵

学校が楽しいと感じるのはいつ以来だっただろう。景子は、数学の授業など上の空で、窓越しの校庭を眺めていた。隣のクラスは体育の授業中で、体育祭の練習をしている。彼が走り高跳びをしている。助走をつけて、彼の体がふわっと浮かび上がる。かけられているバーを揺らすこともなく跳び越え、肩からマットに沈んでゆく。背中を向けて跳び上がるなんて、恐ろしくて自分にはとてもできない。景子はいつもおしりからマットに落ちる。バーも一緒に落ちる。走り高跳びなんて嫌いだったのに、授業が終わるまで目が離せなかった。

景子は真紀子に相談した。

「彼のことなんだけど・・・」

「ああ、解ってる解ってる。応援するよ」

親友ってすごい。彼のが好きになっただって、言わなくても気付いてくれてたんだ。部活動を見に行きたいけど恥ずかしいと思っていたから、今度真紀子にもお願いして一緒に行ってもらおうかな。祐一も陸上競技部だからちょうど良いよね。いつにしようかと、景子は今から楽しみだった。

知らないところで

由美はよく意味がわからなかった。部活動の最中、彼が妙なことを言った。

「俺、佳代に嫌われたかも知れない」

そんなはずはない。今日だって、佳代は嬉しそうに彼の話をしていたし、彼への手紙も預かっているのだから。

「頼まれてもらえないかな。俺は取り返しのつかないことをした。

嫌われても仕方がないと思ってる。でも、ちゃんと会って話したいんだ。ちゃんと、謝りたい。佳代にそう伝えて欲しいんだ」

「何か勘違いしてるんじゃない？今日も佳代から手紙預かってるよ」

「それを受け取る訳にはいかないよ。ちゃんと話ができてからじゃないと」

由美は何が何だかわからなかったけれど、いくら言っても手紙を受け取りそうにはない。勘違いだと思う、と彼に念を押して、帰りに佳代に聞いてみることにした。

やっぱり勘違いだ。由美はそう思った。

「佳代、それはひどいよ。無視されたと思われてもしょうがないんじゃない？」

「だって……わざとじゃないんだもん」

「ちゃんと謝っておきなよ。彼、気にして手紙も受け取らなかったんだから」

「……気にしてたのは、きっと違うこと」

佳代の言うことも、よくわからなくなった。何かあったんだろうか。考えてみれば、ずっと手紙でやり取りしていたのに、突然佳代のクラスまで会いに行くというのは不自然な気がする。謝りたいとか、取り返しがつかないとか、彼はそんなことも言っていた。それなのに、佳代が怒ってもいないし、悲しんでもいないのは、どうしてな

んだらう。

一人相撲

真紀子は苛立ちを抑えられなかった。友達に祐一と付き合い合っていることを話してあげていたら、その中の一人、佳代がとんでもないことを言った。そのせいで、今日は一日中気分が悪かった。景子にでも話してすっきりしようと思い、誘って一緒に帰った。

「彼のことなんだけど……」

何なのよ。自慢話なんて聞きたくない。

「ああ、解ってる解ってる。応援するよ」

こっちは付き合ってる相手のことでイライラしてんの。彼と付き合い合うことになった、みたいなのろけ話を聞かされるなんて冗談じゃない。景子なんて誘わないで、一人で帰れば良かった。

クラブ活動が終わる時間を見計らい、真紀子は祐一に電話をかけた。佳代が言っていたことを確かめなければならぬ。祐一はすぐに出た。早速問いただしてみると、

「真紀子、そんなことより、実は……」

真紀子は納得した。佳代の言っていたことは本当かも知れない。少なくとも自分が想われてはいないということははっきりした。

信じてるから

真紀子が得意気に話すのを、苦い思いで佳代は聞いていた。

「実は祐一と付き合うことにしたんだ」

「やく！きっかけは何？何？」

周りのはやし立てる。

「昨日ね、一緒に遊びに行つて、それで」

話を聞いていると、彼もいたということがわかった。佳代は嫌な予感がした。

「でね、付き合つてくれつて言われて」

祐一がおかしい。自分の時は二人きりで誘つた上にいきなり手まで握ろうとしてきた。

「真紀子を自慢したい、なんて言われて」

佳代はもう、聞いていられなかった。真紀子の友達として、黙つていられなかった。

「真紀子、あのヒトあまりいい噂を聞かないよ。あまり信用し過ぎない方がいいんじゃないかな。最近あのヒトに告白されたばかりの口を知つてる」

真紀子は、はいはい、という感じで聞き流して続きを話し始めた。

自分が告白されたなんて、プライドの高い真紀子にはとても言えない。佳代は真紀子にそれ以上何も言えなかった。

席に戻つた佳代は、彼のことを思い浮かべた。笑顔も声も、鮮明に浮かぶ。ああ、やつぱり。彼のことが好きなんだ。この気持ちは揺らがない。彼が真紀子や景子といる様子を想像してみたけれど、腹が立つことはない。最初は真紀子と景子と祐一の三人で行く予定を立てていたんだと思う。前から真紀子が祐一に気があつたのは知つているし、真紀子の性格なら自分から誘うようなことはしないから、きつと景子が祐一を誘うことになつたはず。そこに彼がいたということとは……。祐一の性格を考えればわかる気がする。彼はきつ

と、自分の意思で行ったんじゃない。彼は優しいから、きっと自分で自分を責めている。さつき会いに来てくれたのは、そのことだったんだ。ちゃんと話せていれば良かった。何とか想いを伝えなきゃ。「自分を責めないで。私は貴方を信じてる」
直接教室へ行く勇氣は持てず、手紙にして、今日中に渡して欲しいと由美にお願いした。

帰り道で由美に聞かれた。

「彼に何かしたの？嫌われたかも知れないって言ってたけど」
きつと今朝のことだ。誤解させてしまった。

「今朝教室まで来てくれたんだけど、恥ずかしくて出て行けなくて顔も見られなくなっちゃって、そのまま友達と話しに行っちゃったの」

「佳代、それはひどいよ。無視されたと思われてもしようがないんじゃない？」

「だって……わざとじゃないんだもん」

「ちゃんと謝っておきなよ。彼、気にして手紙も受け取らなかったんだから」

彼はちゃんと向き合おうとしてくれる。手紙じゃ伝わらないよね。勇氣を出さなきゃ。

「……気にしてたのは、きつと違うこと」

一番欲しかったもの

彼はどうすれば佳代と話ができるのか、そればかりをずっと考えていた。家に着いてから一時間ほど過ぎたが、何も思いつかない。諦めるしかないのか。今更ながら、手紙を受け取っておけば良かったかも知れないと後悔する。佳代との距離は、このままどんどん開くばかりなんだろうか。……電話だ。

「もしもし」

「……佳代です」

彼は何かを喋ったが、何も言葉にならなかった。

「あの……。昨日のことは聞いたんだけど、あまり自分を責めないで。私は信じてるよ」

もう、言葉を紡げない。何て情けないんだ。

「それだけ伝えたかったから。またね」

佳代が自分から電話をくれた。付き合っている手紙でしかやり取りできないほど恥ずかしがりなのに。どれほど勇気が必要だったことか。自分が情けない。佳代の想いはしっかり届いた。自分も応えるんだ。佳代が求めているものをちゃんとわかって、今度は佳代の支えになれるように。

変わってしまったえば

景子があまりにもしつこく誘うので、真紀子は一緒にグラウンドへ行った。景子の目的は彼だ。部活動を見たいらしい。祐一もいるんだからいいじゃない、と景子は言うけれど、だから嫌だったのに。真紀子の祐一への想いが冷めていることを、景子は知らない。

「やっぱり格好いい。憧れるなあ」

確かに跳んでいる時の彼の姿には見とれてしまった。景子の気持ち少しわかった気がする。

「でも景子、彼と付き合ってるのに憧れるっていうのは何か変じゃない?」

「ええっ?付き合ってるんかいなよ。そうならたなら……って思っただけだよ」

真紀子は自分がいかに周りが見えなくなっていたのかを痛感した。祐一の言うことを全部鵜呑みにして、それが全てだと思っていた。もう祐一は信用できない。よく見れば、ぱっとしない、いい加減な男。さっきの彼の跳んでいる姿を見た後では、祐一の走る姿はなおさら霞んでいる。そして程なく、真紀子の瞳に祐一は映らなくなつた。

深く見ている時に広くは見えない

景子は、目が釘付けになっていた。真紀子を誘い、彼の部活動の様子を見に来ていた。

「やっぱり格好いい。憧れるなあ」

あ、こっち向いた。目が合っちゃった。どうしよう。

「でも景子、彼と付き合ってるのに憧れるっていうのは何か変じゃない？」

付き合ってる？真紀子にはそう見えたんだ。ああ、何だか照れくさい。

「ええっ？付き合ってたんかいなよ。そうなれたらな……って思っってはいるけど」

あ、彼がこっち見てる。笑ってくれた！何かのメッセージかな。きつと通じ合っているんだ。ああ、もう想いが抑えられない。早く伝えなくちゃ。

「真紀子、今日はちょっと用事があるから、先に帰ってて」

その時はきた

佳代から電話をもらって三日。彼の気持ちは落ち着いた。あれから、佳代は目が会うと微笑んでくれるようになった。頬を染めながら、はにかむように自分を見る佳代を見て、逆に照れくさくなる。そんなやり取りが嬉しくて、つい、部活動中に何度も佳代を見てしまふ。手紙でのやり取りは相変わらず続いているが、これは大きな変化だと思う。練習を終える前に由美に佳代への手紙を預け、今日の部活動は終了した。着替えを済ませて校門を出ると、景子が待っていた。

彼は困った。まさかとは思いが、この雰囲気は……。

「この前はありがとう」

遊びに行った帰りに送って行ったことだろうか。景子の話は続いている。

「今日、初めて練習見たんだけど、すごいんだね」

この感じは、間違いない。この感じを知っている。以前美穂を呼び出して、想いを伝えるつもりが、結局、他愛もない話しかできなかったあの自分と、今の景子が同じだ。もし、ここで告白なんてされようものなら、どうすればいいんだろう。

「でね。祐一と真紀子が付き合ってたって。羨ましいよね」

段々話題が迫っている。何とか話を切り上げよう。それができなければ……。

「ねえ」

手遅れだ。間違いない。

「私、貴方のことが好き！」

どんな言い方をしようと、傷付けずに済む方法など一つしかない。佳代からの想いを受け取った時とは違う。今はその方法は取れるはずもない。できるだけ、柔らかい言い方を探そう。

「気持ちはいがたいんだけど……。俺、付き合ってるコがいるん

だ。だから、ごめん」

「嘘でしょ？本当なら、誰なのか教えて」

「それは言えない。でも俺は、本当にそのコと付き合ってる。好きなんだ」

「やっぱり嘘。私のこと嫌いならそう言ってよ。どう想ってるのか言ってくれたら諦めるから」

その通りだ、と彼は思った。景子が本気で想いをぶつけてきているのだから、当たり前障りのないような返事に納得できないのは当然のことだ。何より、自分に誓ったんだ。これではいけない。景子を傷付けないことよりも、佳代のことを考えるんだ。景子の想いに応えない理由は何なのか。佳代と付き合っているから？違う。付き合っているからじゃない。佳代のこと好きだからだ。それをはずきりと景子に伝えるんだ。中途半端な返事をしたら、後になって佳代を不安にさせることになるかも知れない。景子の想いをきっぱりと断るんだ。

「悪いけど、俺は好きなコがいる。付き合っていることは信じなくても構わない。私のことをどう想ってるのかわかって言われても、何とも思っていないとしか言えないよ」

景子は何も言わないで走って行った。こんなこと初めての経験だけど、断る方も辛いなんで。知らなかった。こんなに胸が痛むなら、もう、女子の涙は見たくない・・・。

家に着いた彼は、さっきのことを思い返していた。もし、佳代が誰かに告白されたら。それで付き合うことはないとしても、気持ちには嬉しいとか言っていたら。嫌だ。辛い。佳代が誰かとデートしたあの時もそうだった。佳代の気持ち自分が自分に向いているのか不安になる。自分が最後に景子に言ったように、きっぱりと断ったとしたら。結局少し嫉妬はするかも知れないが、安心できる。でも、あれで良かったんだろうか。確かに、逆の立場なら自分は佳代にそうして欲しいと思う。でも、佳代も同じように思うんだろうか。

ああ、電話が鳴っている。

利用できるのなら

真紀子は、ベッドで天井を仰ぎながら、景子の用事というのは何かを考えていた。部活動には所属していないし、習い事もしていない。そもそも、校門の辺りにいて帰ろうとはしていないかった。随分と彼に入れ込んでいたし、付き合っている訳ではなかったようだから、彼に告白でもするのもかも知れない。まあ、そんなことをしても失敗するだろうけれど。景子と付き合うくらいなら、どう考えても自分の方を選ぶだろう。祐一には冷めたところだったし、彼と付き合うのも悪くない。まあまあ格好いいし、走り高跳びの成績は有名だ。勉強のことは知らないけれど、頭は悪くなさそうだし。祐一と比べてみて、祐一の何が好きだったのか不思議に思う。彼のことを考えているうちに、真紀子の頭の中は彼と付き合うきっかけを探すことに染まっていった。

いつの間にか寝入ってしまったらしい。電話の音で気がついた。

電話の相手は景子。

「真紀子、聞いてよお」

景子は泣いている。本当に彼に告白でもしたのかも知れない。

「どうしたの？」

事情を全部聞いて、真紀子は思わず笑みを浮かべた。まさか、想像通りなんて。けれど、ちょうど良かった。これは良いきっかけになる。問題は景子だけれど、もう振られたんだから、気を遣う必要もない。これだけ泣いている景子を放ったらかしにするのは可哀想だから、最後に思い出作りでも手伝ってあげようかな。ああ、楽しくなってきた。

「もう、彼のことは諦めなよ」

「……そうだね」

「未練があるんだね。よし、景子が彼ともう一度話せるように、私が一肌脱ぐよ。その代わり、景子もちょっと私に協力してね」

「何をするの？」

「景子には悪いんだけど……。私も彼のことが好きだったんだ。だから、最後に彼と話す時にそれを伝えてほしいの」

「……真紀子ならきつとうまくいくよ」

当然でしょう。景子とは持っているものが違うんだから。

「応援してくれるんだね。景子、ありがと」

景子との電話を切ると、真紀子は彼に電話をかけた。心にもないことを言いながら、彼を探ってみた。結構優柔不断みたいだから、少しきっかけをあげて、一押しすればいけるだろう。満足した真紀子は最後に、景子に電話をかけるという約束をさせた。これで彼と景子はもう一度話し、景子は諦めるだろう。あとは彼からの電話を待てばいい。景子の性格はよくわかっている。友達だからね。

一つの結末

景子は震える体を自分で抱きしめた。ときどきする。でも大丈夫。彼とは通じ合っているんだから。クラブ活動はさつき終わった。もうすぐ彼が来る。着替えを早く済ませた他の生徒が通るたびに、景子は陰に隠れた。校門の前はこういう時に目立つから困る。けれど、男子生徒が集まっているところで告白するほどの勇氣はない。一人で帰るところをつかまえるしかない。まず、前に送ってもらったお礼を言つて、それから……。彼が来た！

「この前はありがとう」

彼が笑顔で応えてくれる。

「今日、初めて練習見たんだけど、すごいんだね」

彼の笑顔は絶えない。やつぱり、通じ合っているんだ。

「でね。祐一と真紀子が付き合うんだって。羨ましいよね」

話題も秀囲気も良い。今なら言える。怖くない。彼に、想いを伝えるんだ。

「ねえ」

ときどきする。もう一度息を吸う。

「私、貴方のことが好き！」

言った！言えた！頑張ったよ。お願い、応えて。

「気持ちはあるがたいんだけど……」

（けどって何？ちよつと待ってよ。）

「俺、付き合ってるコがいるんだ。だから、ごめん」

（そんな訳ないでしょ！だったら普通、その相手抜きで異性と遊びに行ったりしない）

「嘘でしょ？本当なら、誰なのか教えて」

「それは言えない。でも俺は、本当にそのコと付き合ってる。好きなんだ」

（何で？私を家まで送ってくれたじゃない）

「やっぱり嘘。私のこと嫌いならそう言ってよ。どう想ってるのか言ってくれたら諦めるから」

(さっきだって、練習中でも笑いかけてくれたじゃない)

「悪いけど、俺は好きなコがいる。付き合っていることは信じなくても構わない。私のことをどう想ってるのかわかって言われても、何とも思っていないとしか言えないよ」

(さっきは嬉しいみたいなこと言ったのに！そんな風に思っていたなら、最初から期待させるようなこと言わないで！)

景子はもう言葉を紡ぐことができなかった。溢れる涙を抑えることもできず、誰もいないところへ行ってしまいたくて、もう体は駆け出していた。

家に着く頃には少し落ち着いたものの、まだ涙は止まらない。誰かに聞いてほしい。辛い気持ちをわかってほしい。一緒に考えてほしい。真紀子、助けて。祈るように、すぎるように、電話を手にする。真紀子の声を聞いたら、また気持ちが溢れてきて、声をあげて泣いた。

「どうしたの？」

彼に告白したことから、どんな会話をしたのか、どんな気持ちだったのか、全部話した。

「もう、彼のことは諦めなよ」

(応援してくれるって言うてたのに。慰めて欲しかったのに。ひどい)

「……そうだね」

「未練があるんだね。よし、景子が彼ともう一度話せるように、私が一肌脱ぐよ。その代わりに、景子もちょっと私に協力してね」

(嘘ばかり。私のためじゃない)

「何をするの？」

「景子には悪いんだけど……。私も彼のことが好きだったんだ。だから、最後に彼と話す時にそれを伝えてほしいの」

(信じられない。励ますどころか利用されるなんて。親友だと思っ

てたのに！)

「……真紀子ならきつとうまくいくよ」

(祐一でも彼でも、真紀子には関係ない。真紀子は相手を見ていないんだ。恋がしたいだけ。そんな想いが彼に届くはずがない)

「応援してくれるんだね。景子、ありがとう」

(好きにすればいい。その程度の想いじゃ痛みも感じられない。可哀想に)

数分後、彼から電話がきた。もう内容はわかっている。それでも、もう一度彼と話したかった。声が聞きたかった。

ほんの少しの会話。電話を切つても、涙が止まらない。こんなに苦しいのに。こんなに切ないのに。でも、幸せだって思う。本気でぶつけた想いに、彼は本気で応えてくれた。その彼が好きだって言うんだから、付き合っているコはきつと素敵なコ。応援してあげなきゃいけないんだ。彼のことを想うなら、邪魔をしちゃいけない。彼を好きで良かった。想いを伝えて良かった。ありがとう。二人で幸せになつてね。

見えない気持ちには信じるだけ

彼は電話に出た。真紀子からだ。

「最低」

真紀子にそう言われる筋合いはないが、何となく、景子とこのことのような気がした。

「景子、泣いてたよ」

きつと、あの後真紀子に話したんだろう。でも、景子はこんなことをされても喜ばない。真紀子の勝手なお節介だろう。真紀子の説教は続いている。

「何とも思っていないなんて、ちょっと無神経なんじゃないの？ ひどいよ」

何を言っても怒るだろうな。かと言って黙っている訳にもいかないか。

「……悪かったよ」

「謝ればいいと思ってるでしょう？」

そんなことはない。元々誰かに認めてもらうつもりはないのだから。大切なのは、佳代への想い。

「とにかく、もう一度ちゃんと話をしてあげて。景子は電話を待ってるからね」

こちらの返事を待たずに電話は切れた。やっぱり祐一と似ている。そう考えると、わざと切ったような気がするな。そうすれば景子に電話をかけると思っているんだろう。真紀子の思惑はどっちでも構わないが、景子には一言伝えよう。彼は電話をかけた。

「こんな時間に、ごめん」

「真紀子に何か言われたんでしょう？」

「言われたよ。でも、電話した理由はそれだけじゃないんだ」

「謝らないで。辛いから」

「そうじゃないよ。こういうの、最後にしよう。今日話した通り、

俺は付き合ってるコがいる。そのコを不安にさせたり、余計な心配をかけるようなことはしたくないんだ。俺が逆の立場だったら、怖くて不安で、いらなくなる。だから、電話とか、これが最後にしよう」

「私がそれを素直に聞くと思う?」

「思う。だから話したんだ。会話すれば、真紀子とは違うことくらいすぐにわかるよ」

「バカみたい」

「よく言われるよ」

「真紀子が話があるんだって。無理にとは言わないけど、良かったら電話してみて。貴方みたいに真っ直ぐ過ぎる気持ちなら、真紀子を変えてあげられるかも知れない」

「考えてみるよ。それじゃ」

景子はわかってくれただろう。真紀子の話ならさつき聞いた。でも、それをわかっていた景子が言うんだから、まだ何か話があるということだろうか。放っておいて佳代との関係に影響するくらいなら、ちゃんとした方がいい。あまり気は進まないものの、真紀子に電話をかけてみる。

「何か話があるって聞いたんだけど」

「私の気持ち聞いた?」

「気持ち?」

「ねえ、私のことどう思う?」

呆れた。ついさつき、景子のことを気遣って電話をかけてきたはずなのに。何を言い出すんだろう。

「祐一のことが好きなんだろ?」

「好きな振りしてたの。本当は、貴方のことが好きだったんだよ。嘘だ。遊びに行った時の様子を見れば明らかだ。あれは演技じゃない。恋ができれば誰でもいいって言うのか?」

「ねえ、私のことどう思うか聞かせて」

真紀子の声のトーンが変わった。もう、苛立ちを抑えられない。景

子のことで電話をかけてきたのは、このためか。景子のことを気遣っていた訳じゃなかったのか。わざわざこのタイミングで、景子に間に挟んで言わなくてもいいだろう。傷付けていることがわかっていないのか、それとも……。それでも景子は真紀子を気遣っていたの。

この質問をされるのは今日二度目だ。景子の時は悩んだ。考えて、考え抜いて、やっと選んだ答えでも、痛みを伴った。でも、今度は違う。答えは一つしかない。

「何とも思っていない」

真紀子は何も言わない。しばらくして、鼻をすするような声が聞こえてきた。彼は黙って電話を切った。今度は、見ずに済んだ。たとえ相手が真紀子でも、涙を見るのは辛い。電話で良かった。切ってしまうえば、頭にくる声も、何も聞こえない。目の前にいなくて、本当に良かったと思う。目の前にいたら、「嘘泣きか」と言ってしまうのだろうか。

もう一つの結末

真紀子は電話に出た。彼からだ。

「何か話があるって聞いたんだけど」

（ちゃんと言わなかったんだ、景子。景子の性格なら、私の気持ちも伝えて、「真紀子とお似合いだよ」とか言うと思ってたんだけど。そうすれば彼は私の気持ちを確かめたくてすぐにでも電話をかけてくるからね。予定とは違うみたいだけれど、電話がきたんだからあまり変わりはない）

「私の気持ち聞いた？」

「気持ち？」

ここまで言えばわかっているはず。とぼけるなんて可愛いところもあるんだ。

「ねえ、私のことどう思う？」

「祐一のことが好きなんだろ？」

嫉妬してる。安心させてあげるからね。

「好きな振りしてたの。本当は、貴方のことが好きだったんだよ」
しばらく沈黙が支配する。ときどきして、心臓の音が聞こえているんでしょ。もう一息。

真紀子は甘えた声を出した。

「ねえ、私のことどう思うか聞かせて」

答えは出ている。一つしかない。

「何とも思っていない」

真紀子はその言葉を繰り返した。何とも思っていない。何とも思っていない。何とも思っていない。目の奥が熱い。鼻の奥が熱い。彼のことなんて好きでも何でもないのに。涙が止まらない。どうすればいいの？何て言えばいいの？ねえ、何か言って。

お願い、何か言って。沈黙は続く。もう真紀子は耐えられず、言葉にならない声が溢れ出す。耳に当てた器械からは電子音が聞こえて

いる。彼の声は聞こえない。頭の中に電子音が鳴り響く。ツ、ツ、ツ、ツ。電話が切れたことを理解した真紀子は、腕をだらりと下ろした。真紀子の涙は、もう止まっていた。

真っ直ぐな想い

佳代は、手紙の内容が気にかかっていた。最近、彼は必ず「本当に俺のことが好きなのか？」と書いてくる。なぜ急にそんなことを言い出したのか、全く心当たりがない。気持ちを疑いたくなるようなことが、何かあったのかも知れない。とはいえ佳代も、彼が本当に自分のことを好きなのか、いつも不安だった。だから、彼の気持ちは痛いほどよくわかる。不安になった理由はわからなくても、何とか安心させてあげたかった。

彼の誕生日が近いので、手作りのお菓子を贈ることにした。材料を買いに行くと、誰も見ていないのに、周りが気になってしまう。知り合いに会ったとしても、何に使うのかもわかるはずがないのに、なぜかこそこそしてしまふ。お菓子のコーナーに着く頃には、頬が真っ赤に染まっていた。

売り場にはたくさん材料がある。佳代はお菓子を作ったことはあったけれど、誰かに食べてもらうために作るのは初めてだった。彼は水色が好きだって言ってたから、これをトッピングしよう。甘いものは好きって言ってたから、クリームは大丈夫だね。結構大人っぽいところがあるから、ビターチョコとか似合うかも。ブラックのコーヒールとかと一緒に。あ、でも苦いのは自分が飲めないな。紅茶と一緒に飲んでくれるかな。ああ、一緒になんて無理。恥ずかしいよ。いつか、そんな風にできるかなあ。

彼の誕生日。佳代は自分の素直な気持ちを手紙に込め、お菓子と一緒に彼に贈った。渡してくれたのは由美だけだ。

その日を境に、彼の手紙からは、「本当に俺のことが好きなのか？」という一文が消えた。佳代は自分の気持ちが届いて、本当に嬉しかった。

弱音だつて自然に

彼は、想いに対して敏感になり、臆病にもなった。真紀子の中の想いを目の当たりにしたせいかも知れない。佳代の気持ちも確かめずにはいられなかった。手紙には「本当に俺のことが好きなのか？」と、必ず書くようになった。そのたびに佳代は、言葉を変えて応えてくれた。それでその場は何とか安心できたが、長くは続かなかつた。結局、次の手紙を書く頃には、またあの一文が入っていた。今まで深く考えてこなかったが、よくよく考えてみれば、不安なことばかりだ。付き合つて半年近いにも関わらず、手をつないだことはもちろんのこと、一緒にでかけたことも、ゆっくり会話したこともない。手紙で想いを伝え、手紙で対話をし、今でもそれが続いている。あまりにも不安になつて、部活の練習中について由美に話した。

「俺と佳代つてき、付き合ってるのかな？付き合ってるんだよね？」

「何バカなこと言つてんの。何かあつたの？」

「何も無いから、不安なんだよ」

「何を今更。佳代はああいうコなの。好きだから、普通に話せないんだよ？クラスの男子とは普通に話してるからね」

「ずるいよなあ。納得するしかない」

「さ。わかつたら練習頑張りなさい」

いつものような会話。でも、由美の様子がいつもと少し違う気がする。

「もうすぐ雨が降るから、今日は片付け」

「何でわかるの？天気予報は晴れだけど」

「夢でお告げがあつたんだ」

「バカじゃないの。そんなの当たる訳ない」
当たつてもらわないと困る。

「何か、あつただろ」

「何、急に？何も無いけど」

「夢でお告げがあったんだ」

「バカじゃないの。そんなの……」

雨が降ってきた。

「俺、片付けやっどくよ」

「私も手伝うってば」

「濡れるだろ。こういう時は素直に男のヒトに甘えておきなさい」

「そういうバカみたいな話を私も聞きたいって、佳代はいつも言うてるよ」

はぐらかされたかな。言いたくないことなら仕方がないか。

「その日を楽しみに頑張るかなあ。んじゃ、佳代に聞かせてやってよ。片付けはいいよ」

「……はいはい。お願いします」

由美と話していると元気になる。佳代とのこともあんなに悩んでいたのに、ほっとする。この安心も長くは続かないだろうけど。

かけがえのない気持ち

いつものように手紙を受け取る。彼は、手にしたものの違和感に気付く。二通ある。由美はにこにこしながら言う。

「一通は私から。って言うっても佳代のオマケで特別に、だぞ。感謝しなよ」

「光荣でございます。開けていい？」

「帰ってからね。それから、これも」

箱？これも二つある。

「これも一つは特別ですかね」

「そ。小さい方が私からだよ。帰るまで開けちゃダメだよ。十四歳おめでとう！」

由美はすぐに走って行ってしまった。お礼を言いそびれた。そうか。今日は誕生日だ。佳代のことです不安ばかりで、そんなこと考えている余裕がなかったんだ。佳代と由美は覚えていてくれて、祝ってくれて。嬉しいな。

家に着いて、早速開けようと思ったところで彼の手は止まった。どれから開ければいいのか。開ける順番が関係あるのかわからないが、いつもは手紙が一通あるだけなので、気にしたことがなかった。箱はプレゼントだろうから、先に手紙を開けよう。佳代と由美とどっちから？こういう場合は、やっぱり佳代からで良いのだろうか。誰かにチェックされる訳でもないが、気持ちが込められていると思うと、どっちも先に開けたくなる。結局、悩んだ末に、佳代の手紙を開けた。

「不安にさせて、ごめんなさい。でも、本当に好きなの。今は恥ずかしくて堂々と会えないけど、本当に好きなの。だから、俺のこと好きなのかって疑うのはもうやめて。私も不安だけど、貴方のこと信じてるから聞かないんだよ。だから、私のことも信じてほしい」
彼ははっとした。佳代のことを疑っていた。そんなつもりは当然な

かったが、確かにそうだ。佳代に何度も「私のこと本当に好き？」と聞かれたら、好きだとしか言いようがないし、信じてもらえないのかと悲しくなる。何で気付かなかったのか。何度もこうして佳代の想いに支えられて、そのたびに、今度は自分が佳代の支えになるんだと思ってきたはずなのに。恋人らしい付き合いなんて、形じゃないんだ。会わなくても、佳代の想いは溢れていて、こんなに届いている。手紙だって、文字だけじゃない。その文字の向こうに、佳代がいる。もう、安心だ。佳代の気持ちを疑うことなんてない。彼は佳代に本当に感謝した。

悩んでいたことが馬鹿馬鹿しいと思うほどに、清々しい気分で由美の手紙を開ける。

「私のは買ったけど、佳代のは手作りだからね！よく味わって食べなよ」

佳代はプレゼントにも精一杯想いを込めようとしてくれていたんだ。自分がどれだけ心配をかけていたのか、情けなくなる。由美も、何もくれなくてもおかしくないのに、気を遣わせてしまったな。本当に味わって食べなければ。箱を開けると、佳代の方は、好みをよくわかってくれていいるお菓子が入っていた。由美の方は、市販のものに見せかけた、手作りのお菓子が入っていた。きつと佳代に気を遣って、買ったなんて言ったんだろう。いつも周りに気を遣ってばかりで、大丈夫かな。この間も何かあったはずなのに、結局言わなかった。誰か由美の支えになるヒトはいるんだろうか。

友達以上恋人未満

由美は隠れるようにして、手紙を読んでいた。当然、彼や佳代のものではない。今まで一度だって、勝手に中を見たことはない。佳代に見せられて、彼の書いた手紙を読んだことはあるけれど。今読んでいる手紙は、由美の下駄箱に入っていた手紙だ。

「本当は由美のことが好きだったんだ。佳代とは別れるから、付き合ってくれないか」

差出人は、彼。のはずがない。確かに彼の名前は書いてあるけれど、自分のことを好きはずがないし、何より、字が彼のものじゃない。彼の手紙を読んだことがなかったら、変な期待を持ってしまったかも知れないと思うと、自分が嫌になった。彼のことは好きだけれど、佳代を応援するって決めた。今は、彼と佳代が付き合っていることも嫌じゃない。それなのに、何でこんなものが……。由美は自分の気持ちが揺らいだのを感じた。

本当の差出人は誰なんだろう。彼と佳代が付き合っていることは、自分しか知らないはず。佳代にこんな手紙は冗談でも見せられないし、彼に見せるのは怖い。本当は由美のことが好き、なんて書いてあるせいで、意識してしまう。本人に、「そんな訳ない」とか言われたらと思うと、とても見せられない。二人が付き合っていることを知っているヒトが他にもいるのか確認したいけれど、そんなヒトがいるなら、誰なのか教えてくれているはず。結局、何もできない。気味の悪い手紙。

その日の部活動で、練習中に彼が妙なことを言い出した。

「俺と佳代ってさ、付き合ってるのかな？付き合ってるんだよね？」

「何バカなこと言ってるの。何かあったの？」

「何もないから、不安なんだよ」

そういうことか。半年も付き合えば、早ければキスくらいするコもいるし、手くらい普通につなぐし、デートしたことがないなんて、

普通はあり得ない、と由美も思う。

「何を今更。佳代はああいうコなの。好きだから、普通に話せないんだよ？クラスの男子とは普通に話してるからね」

「ずるいよなあ。納得するしかない」

「さ。わかつたら練習頑張りなさい」

逆に、そんな状態のままこれだけ続けているんだから、相当深い想いなんじゃないかと由美は思う。

「もうすぐ雨が降るから、今日は片付け」

珍しい。雨が降る気配なんて全くない。彼はいつも楽しそうに練習していて、サボったりはしない。

「何でわかるの？天気予報は晴れだけど」

「夢でお告げがあったんだ」

いつものくだらない会話か。それが結構楽しいんだけど。

「バカじゃないの。そんなの当たる訳ない」

少しだけ、間が空く。

「何か、あっただろ」

あの目は、真剣な時の目だ。彼は変なところで鋭い。何でわかったんだろう。

「何、急に？何も無いけど」

「夢でお告げがあったんだ」

「バカじゃないの。そんなの……」

本当に雨が降ってきた。

「俺、片付けやつとくよ」

彼は、男は女を護るもの、みたいな変な価値観を持っている。そういうところ、嫌いじゃない。

「私も手伝うってば」

「濡れるだろ。こういう時は素直に男のヒトに甘えておきなさい」

彼の目は真剣なまま。悩みを言えって言ってるのかな。甘えたくなっちゃうよ。困るじゃない。甘えた後は、止まるのがすごく大変なんだからね。

「そういうバカみたいな話を私も聞きたいって、佳代はいつも言うてるよ」

「その日を楽しみに頑張るかなあ。んじゃ、佳代に聞かせてやってよ。片付けはいいよ」

彼の目が戻った。とりあえずはごまかせたのかな。話していると、誘惑に負けそう。

「……はいはい。お願いします」

佳代が彼の誕生日に、手作りのお菓子を贈るらしい。一緒に作るうと誘われたけれど、佳代と同じ位置から同じものを贈るなんてできないから断った。でも、せっかくだから、何か贈ろうかな。最近悩んでるみたいだし、ちょっと応援してあげよう。

彼の誕生日。予想はしていたけれど、佳代は自分でプレゼントを渡せないらしい。由美は、佳代の手紙と贈り物を預かって、届けてあげた。自分のもあるから照れくさくて、ちょっと変な言い方をしちゃったかな。これで少しは元気になってくれるといいんだけど。

力になりたい

風が勢いを増し、山々が一色に戻る。どこへ行っても浮かれた雰
囲気は消えない。クリスマスも近いからこんなものか、と彼はぼん
やりと窓の外を眺めている。佳代とは相変わらず手紙でのやり取り
が続いている。にも関わらず、佳代と付き合っていることがそこら
中に広まり、噂になっている。なぜかはわからない。佳代も由美も
わからないと言っていた。ただ、由美は何かを隠している。由美は
保身のために隠し事をしたりはしないから、この噂とは関係ないか
も知らないが、その隠し事が由美の負担になっているのは間違いな
いだろう。佳代は噂のせいで、前ほど目を合わせてはくれない。そ
れで佳代の想いを疑うようなことはもうないが、佳代は周りに色々
聞かれて隠すことに疲れている。自分がこうして余裕がある時こそ、
佳代や由美の力になってあげたいと思う。まず何から動くべきか。

授業中もそれを考えながら外を眺めていると、木村が声をかけて
きた。同じクラスなのに、しばらく前まではほとんど交流はなかつ
たが、同じ班になってからはよく話すようになった。超真面目とい
うのか、素直というのか、考え方に融通がきかないのは木村の長所
であり短所。そういうところが結構好きで、最近はかなり親しくし
ている。

「あのさ、好きなコができたんだけど、どうやって伝えるのがいい
かな？」

授業中に何を言い出すのかと思えば。

「何で俺に？」

「だって付き合」

「わかったから言っな」

確かに佳代と付き合っではいるが、あれこれ助言できるほどの経験
はない。それに、自分が想いを伝えようとした経験を振り返ると、
無責任なことは言えないというのはわかっている。

「そのコと仲良いの？」

「同じ班なん」

「もういい、授業終わってからにしよう」

木村は、今ここで伝えたいのだろうか。何も考えていないのか、計算しているのか、わからないから困る。無難なことだけ話して、後は自分で考えさせよう。

とりあえず親しくなるように言うと、映画にでも誘ってみると言っていた。いきなりそんなところへ一緒に来てくれるのか。無理だとは思いつつも、経験が一番大事だろうと思い、止めなかった。木村は早速誘い、戻ってきた。

「やったよ。いいって」

そんな馬鹿な。彼は、自分の経験など全くあてにならないかも知れないと思った。

「みんな遊びに行こうよって誘ったら、いいよって」

「そんなことだろうと思ったよ」

「クリスマスの日だから、空けといてよ」

そうだ。木村はそういう男だった。これが計算だったらすごいと思う。何にしても、女子が来るのに、行く訳にはいかない。もう、そういうことはしないと、自分に誓ったのだから。断ろうと思ったが、ふと、彼はあることを思いついた。

どこまでも真っ直ぐに

佳代は、マフラーを編んでいた。彼にあげたくてやってみているけれど、初めてのせいかわからない、不器用なせいかわからない。クリスマスに間に合わせようと思っていたのに、このままじゃとても間に合わない。せつなく、彼と初めてのデートなのに。由美に教えてもらおうかな。

クリスマスは、彼の方から誘ってくれた。彼の友達と、そのヒトが想いを寄せているというコガと一緒に行くけれど、彼がいるなら他に誰がいようと関係なかった。彼との関係は今更隠してもあまり意味がないし、二人きりでのデートはとも勇気が出なかったから、ちよつと良かった。ちゃんと話せるかな。何を話せばいいかな。手紙だと次々と言葉が浮かぶのに、彼に話しかけると思うと、何を言えればいいのかわからない。やっぱり、由美に相談しよう。マフラーの編み方も教えてもらいたいし。佳代は、この機会に頑張つて彼と普通に会話できるようにしたいと、心から思っていた。

信頼か親愛か

冬場の練習は、寒くて嫌になる。どの種目でも、体力をつけるという名目で長距離を走ることが増えるから、由美は尚更冬場の練習が嫌いだった。この時期は本当に、種目別の練習がありがたい。走り高跳びは技術中心の練習が多くて、体力面はそれほど辛くないから。

「やっと休める……」

彼も同じようなことを思っているみたい。由美はそれを聞いて少し嬉しくなった。

「ここは天国だよねえ」

「そんなに俺に会いたかったか」

「何バカなこと言ってるの」

何バカなこと言ってるの！由美は心の中でもう一度叫んだ。「冗談なのはわかっていても、どきっとする。

「俺は由美と話すの好きだけど」

本気なのか冗談なのかわからない言い方をするから困る。表情に出ないうちに話題を変えよう。

「ねえ、クリスマスに佳代とデートするって聞いたけど本当？」

「ん。耳が早いね」

「よく佳代がOKしたよね」

「ああ、他にもう二人いるんだ」

「それでも、だよ。普段会話もできないのにさ。当日はちゃんと話しかけてあげてよ」

「もちろん。俺だっただけで話したいのを我慢してきたんだから少し、羨ましいな。佳代もそう思ってる。想いが通じ合っつて、いいな。」

「さて、練習しますか」

「ちょっと聞いていいかな？」

彼がわざわざ断りを入れる時は、結構突っ込んだことを聞いてくる。「ダメ。練習に集中しなさい」

彼はいつも、こういう時は断れば気持ちを察してそれ以上聞いてこない。

「俺さ、最近商売始めたんだよ」

「それはそれは。儲けたらおごってね」

「俺を助けると思って、買ってくれない？」

冗談にしては、前振りが長い。彼にしては珍しい気がする。実際に商売なんかするはずないけれど。

「どうせぼったくりでしょ。やだ」

「まあ品質は大したことないけどね。いくらなら買ってくれる？」

「ん〜十円」

何を売るって言うのか、落ちが少し楽しみ。結構引つ張ったんだから、面白いこと言ってもらわないとね。

「よし、売った。約束だから買ってくれ」

「で、何をくれるの？」

「親切」

「は？そんなのいらない」

面白くない。結構、残念。面白い時は面白いのに。

「いや、約束だから買ってもらおう」

「強引だなあ」

「押し売りだからね」

「迷惑な商売だね」

「何か、あつただろ」

そうきたか。余計な約束しちゃったな。

「あれからずっと考えてるんだけどさ。解決してないだろ？見てればわかるよ」

鋭いんだよなあ。どうしよう。あの気味の悪い手紙は、あれから同じような内容のものが二通きた。内容は全部違ったけれど、彼と佳代の関係を壊そうとしてるのは共通してた。いっそ話しちゃおうか

な。

「悪い男にでも、騙されたのか？」

「そんな訳ないでしょ。男を見る目はあります」

当たらずとも遠からず、かな。手紙の差出人が男だったとしたら。

「じゃ、良い男にでも、騙されたのか？」

「ええ、まさに今。貴方に騙されています」

「俺は、真剣なんだ」

どきつとする。目を合わせたら、逸らせなくなった。今までとは、雰囲気が違う。初めて見る表情で、じつとこっちを見据えている。何だか全部見透かされそうで怖い。彼への想いまで。

「話したくない？俺は信用できない？」

そんなこと、ない。周囲の男のヒトの中では一番信用している。そんなことは言えないけれど、信用しているってことは伝えたい。でも、言葉が出ない。彼から目を逸らせない。いつもみたいに、軽口を言えない。こんなに目を合わせて話したことはなかった。どきどきする。体が震えている。もしかしたら、頬が染まってしまったかも知れない。でも、目が逸らせない。彼の視線から逃げられない。

「ん。まあ無理には言わないよ。でもさ、困ってんなら誰か頼れよ。俺じゃなくてもいいんだ。一人で抱えてたら潰れちゃうぞ」

いつもの彼に戻った。こんな一面もあったんだ。いつも飄々としていて、軽口ばかり言ってたから、全然想像できなかった。ああ、ま
ずいよ。甘えたくなっちゃうよ。

「商売成立つと。話し込んで悪かったな。さて、練習に戻りますか。夢は全国制覇！毎度あり〜」

どうしよう。彼になら、話してもいいって思う。力になってくれるって思う。言ってもいいのかな。頼っていいのかな。甘えちゃっていいのかな。わからないよ、佳代。

どちらも好きだから

彼は、木村に感謝していた。木村のお陰で佳代とデートできる。

駄目元で佳代に聞いたら、四人でなら大丈夫と、あっさりOKしてくれた。この機会に何とか話せるようになれば、佳代も少しは楽になるはず。付き合っていることを必死で隠す必要もなくなるし、伝えたいことは堂々と会って話せばいい。表情や仕草、そういうものが見えれば、言葉以上に想いは伝わる。きつと、今まで以上に佳代の支えになれるはず。とりあえず、佳代のことは一安心かな。

由美は相変わらず様子がおかしい。誰が見てもわかるような変化ではないが、ほぼ毎日近くで一緒に練習してきたのだから、自分にはわかる。あの様子だと、誰にも相談していない。ずっと一人で抱え込んでいるということになる。何とか力になれないものかと考えていると、木村が話しかけてきた。

「クリスマスの時なんだけど、いいところを見せたいんだ。協力してくれるよね」

「ん、いいよ。頑張ってくれ」

嘘がないくらいに木村を持ち上げるつもりは最初からあった。うまくいくものなら、木村にとっては嬉しいことだろうし、できる限りの協力と応援はしてやりたい。

クラブ活動の時間になると憂鬱になった。走り高跳びは好きだが、この時期は練習で走ることが多過ぎて、辛い。

「やっと休める・・・」

ウォーミングアップで2km、体力強化練習で10km。一時間走り通し。我ながらよく生きているといつも思う。

「ここは天国だよねえ」

由美も似たようなことを思っていたらしい。由美と話して少し元気をもらおうと、ふざけてみる。

「そんなに俺に会いたかったか」

「何バカなこと言ってるの」

冗談だとわかっていても傷付くな。それでも由美の声を聞くとなぜかほっとする。

「俺は由美と話すの好きだけど」

つい、本音が出た。由美が黙ってしまった。まずい。何か気まずい。「ねえ、クリスマスに佳代とデートするって聞いたけど本当？」

沈黙は由美から破ってくれた。助かった。

「ん。耳が早いね」

「よく佳代がOKしたよね」

「ああ、他にもう二人いるんだ」

「それでも、だよ。普段会話もできないのにさ。当日はちゃんと話しかけてあげてよ」

「もちろん。俺だっつてずっと話したいのを我慢してきたんだから」

いつものように、由美は佳代のことを気遣っている。由美も何か悩んでいるはずなのに、そういうところは変わらない。こんなに一人で抱え込んだままで大丈夫なのだろうか。もう一度、聞いてみようか。

「さて、練習しますか」

由美が言う。当然、練習はちゃんとするが、今日は真剣に話したいからな。大切な話と集中した練習は、両立できない。どちらも中途半端になっつては意味がない。この休憩が終わる前に話そう。

「ちよつと聞いていいかな？」

「ダメ。練習に集中しなさい」

由美が拒絶した時は、突っ込まない。いつもはそうなんだが、それでは、結局何も力にはなれないだろう。ちよつとやり方を変えてみるか。

「俺さ、最近商売始めたんだよ」

「それはそれは。儲けたらおごってね」

この反応はあまり乗り気じゃない。少し食いついてもらわないとうまくいかない。

「俺を助けると思っで、買っでくれなひ？」

「どうせぼったくりでしよ。やだ」

もう一押し。

「まあ品質は大したことはなひけどね。いくらなら買っでくれる？」

「んゝ十円」

立派な約束ができた。由美の律儀な性格に賭けてみる。

「よし、売った。約束だから買っでくれ」

「で、何をくれるの？」

「親切」

「は？そんなのいらなひ」

約束があるからまだ押せる。こんな回りくどいことをしなくても、最初から突っ込んだ話をしても良いのかも知れなひが、人付き合ひにはルールがある。それを守らなひようでは信用してはもらえなひ。

「いや、約束だから買っでもらう」

「強引だなあ」

「押し売りだからね」

「迷惑な商売だね」

本題に入る。

「何か、あつただろ」

由美は答えなひ。言葉を続ける。

「あれからずつと考へてるんだけどさ。解決してなひだろ？見てればわかるよ」

由美は黙っでいる。具体的に聞いて、反応を見た方が良いのかも知れなひ。

「悪い男にでも、騙されたのか？」

「そんな訳なひでしよ。男を見る目はあります」

「じゃ、良い男にでも、騙されたのか？」

「ええ、まさに今。貴方に騙されています」

男女関係とかではなさそうだが、いまいち確信は持てなひ。他の話も適当にはぐらかされたら、由美が相手では見抜けなひだろ。結

局、正攻法しかない。自分の気持ちを伝えるために、雰囲気も変える。

「俺は、真剣なんだ」

由美は黙っている。でも、目は逸らさない。真剣に向き合ってくれている証拠だ。迷っているようにも見える。信用されていないから話さないのか、何か理由があって話せないのか。何か抱えているのは間違いない。

「話したくない？俺は信用できない？」

由美はまだ黙っている。何か言おうとしているように見えるが、何も言わない。これ以上は由美を困らせるだけか。

「ん。まあ無理にとは言わないよ。でもさ、困ってんなら誰か頼れよ。俺じゃなくてもいいんだ。一人で抱えてたら潰れちゃうぞ」

由美がほっとしているようにも見える。踏み込み過ぎたのかも知れない。気負わせないように気をつけなければ。これで由美に気を遣わせてしまったら本末転倒だ。

「商売成立つと。話し込んで悪かったな。さて、練習に戻りますか。夢は全国制覇！毎度あり〜」

待ちに待ったクリスマスがやってきた。木村と一緒に待ち合わせ場所へ行き、話しながら待った。

「お待たせ」

突然後ろから声をかけられて、木村と一緒に驚いた。振り返ると、佳代がいる。間違いない。目の前に、佳代がいる。心臓の音が聞こえる。いつ以来だろう。時間が止まる。心臓の音だけが聞こえる。佳代のはにかんだ笑顔だけが映る。この感覚。誰かを想うっていうのは、素敵なことだ。今日はどれだけ佳代と話せるのだろう。この時間が、ずっと続けばいいのに。

やっと届いた想い

クリスマスがやってきた。佳代は、予定より早く待ち合わせ場所に着いてしまった。結局マフラーは由美に編み方を教わっても間に合わず、半分もできていない。ちゃんと完成したら渡したい。

遠くに、彼とその友達が見えた。思わず隠れてしまう。こっちは気付いていない。どうしよう。恥ずかしいよ。もう、彼はすぐそこにいるのに。こんなに近くににいるのに。この距離は埋まらない。……違う。そうじゃないんだ。自分で近付いて行かなきゃいけないんだ。勇気を出すって決めたんだから。彼とちゃんと話したいんだから。ゆっくりと、彼の待つ方へと歩いて行く。彼の背中が、どんどん大きくなる。もう、手が届きそう。最初の一言。それさえ勇気を出して言えば、変わる。きっと、彼にもっと近付けるはず。大きく深呼吸をする。うん。言える。何で今までこんなことができなかつたんだろう。彼に心の中で謝る。今までごめんね。「お待たせ」

今までが嘘のように、彼と会話ができる。まだ真っ直ぐ顔を見られないけれど、こんなに近くで彼の笑顔が見られる。彼の声が聞ける。嬉しい！楽しい！ずっとこの時間が続けばいいのに。

四人でボーリング場に入って、ゲームをすることになった。負けたらジュースをおごる約束。ちゃんと男女でハンデをつけてくれたから、頑張れば大丈夫かな。彼は器用だからこういうのは得意なはず。何だか、遊びでも何かをする姿を見るのはどきどきする。やっぱり跳んでいる時が一番格好いいけれど、こういう姿も新鮮で、見られることが嬉しい。結果は彼が負けて、ジュースをおごっていたけれど、少しも格好悪くなんかなかったよ。利き腕じゃない方でやっていたから、きつと友達を立てていたんだよね。優しいな。

クリスマス飾りで彩られた街中が、彼と自分を祝福してくれてい

るような気になる。彼のそばにいたことがこんなに幸せなことだったなんて。ずっとずっと遠回りしてきたけれど、やっとここに来てられた。これからも、ずっと彼のそばにいられますように。

限界

年が明けて、また学校生活が始まる。由美は四度目の手紙を受け取った。今までは差出人が彼だったのに、今回は違う。でも、字が同じ。

「俺と付き合わない？」

たったそれだけ。でも、今回は写真が入ってる。彼と一緒に笑顔で写っている写真。服装や背景が上手に見切れていて、この写真だけ見たら、まるで恋人同士のような、そんな写真。これは間違いなく部活動中の写真だけれど、そんなことがわかるのは彼くらいしかない。他のヒトが見たら、どう見ても勘違いする、そんな写真。今まで意識したことはなかったけれど、彼と話している姿は外から見るとこんな風に映るんだ。やっぱり、彼のことが好きなんだろうな。どうしよう。こんなの、誰にも相談できない。この写真を佳代が見たとしても、彼の想いを疑うことはないだろうけれど、こんなの佳代に見せたくない。佳代だったら、自分の想いに気付いてしまうかも知れない。最悪の場合、佳代が身を引くと言い出しかねない。そんなのは、嫌だ。彼と佳代が互いに好きなのはよくわかる。自分だって彼を想ってはいるけれど、彼と佳代との関係を壊してまで結ばれたとしても全然幸せじゃない。この差出人に答えなければ、写真が佳代の目に入るのはほぼ間違いない。どうすればいいの。もう、自分じゃどうにもできないよ。助けて。

好きってこと

窓の外では雪が舞っている。彼の好きな数学の時間だが、今は他の問題を抱えている。数式よりも厄介なこの問題を、どう解いたものか。当然、景色の中に答えはない。佳代とはクリスマスにあれほど普通に会話したにも関わらず、年が明けた今も手紙でのやり取りが続いている。もう慣れていたのでそのまま受け入れているが、不思議で仕方ない。クリスマスだったからだろうか。学校の外だったからだろうか。とにかく、佳代が恥ずかしいと言っただから、受け入れるしかない。

由美の悩みはどうなっているのだろう。学校が休みの間は顔を合わせていないから、部活動で様子を見て、おかしいようならまた聞いてみよう。あそこまで無理をしなくても良いと思うが、無理をしている訳ではないのだろうか。

当面の問題は、木村。クリスマスで盛り上がって、告白を決意したらしい。それは何よりなことで、応援したいと思っている。問題は、そのやり方だった。

どうやって告白したのか聞かれ、実際には佳代から告白されたのだがそれは言わず、手紙で伝えたと話すと、木村もそうすると言った。一から十まで色々聞かれ、女子の好みがわからないから封筒や便箋を用意してくれと頼まれた。自分もよくわからないのだが、佳代とのやり取りに使っているものを少し分けてあげた。すると、木村はとんでもないことを言った。

「俺、字が下手だから、代わりに書いてよ」

「木村の気持ち伝えるんだから、俺が書いたら意味がないだろ」「何て書いたらいいのかもわからないし、頼むよ」

結局、色々言っただけ押し付けられた。仕方なく木村の性格や口癖を思い浮かべながら、相手の何を好きになりそうなのか考えた。そうして、苦労して書き上げたラブレターが手元にある。数学の時間が終

わつたら、木村に渡すことになっている。こんなやり方でいいのだろうか。木村の想いはどこにあるというのだろうか。そもそも、思いがあるのだろうか。

数学の時間が終わってしまった。

「ね、手紙できた？」

「一応できたけど、ちゃんと木村の言葉で書き直せよ」

「いやいや。大先輩の文に直すところなんてないって。このまま渡すよ」

「は？中も見ないでそのまま渡すつもりだったのか？駄目だ、返せ」
「もうもらったよ。ありがとね」

これはどう考えてもお手上げだ。失敗するまで、木村が間違いに気付くことはない。

「あとさ、もう一つお願いがあるんだけど」

「何か一つくらい、自分でもやれよ……」

「これが最後！本番は俺が頑張るからさ。手紙を渡すために、人目につかないところに呼び出してほしいんだ。お願い！」

直接渡すくらいなら手紙じゃなくてちゃんと言えよ、と思ったが、もう黙っていた。木村の頼みを引き受け、相手の口に頼んで、屋上への階段に来てもらう約束をした。当然、自分に行かない。

授業後、木村が約束の場所へ行く直前に話しかけてきた。

「色々、ありがと。俺、こういうの初めてでよくわかんないけど、頑張ってくるから。だから、戻って来るまで待っててよ。何か、すぐくどきどきして不安なんだ。頼むよ」

「ん。わかった。待ってるよ」

部活動には遅刻決定だが、ここまで関わると責任も感じるし、木村も放っておけない。木村は木村なりに一生懸命なんだろう。こういう時は周りが見えなくなるのはよくわかる。想いの伝え方が、木村はわからない。それでもなんとか伝えたいという気持ちだが、木村を動かした。だからこそ、応援してやりたいと思った。これで良かったんだろうか。応援したいからこそ、おかしいと思うことはちゃ

んと正すべきではなかっただろうか。手紙を用意し、手紙を書き上げ、相手呼び出した。これでは、自分が告白するのと変わらない。木村の想いが相手に伝わらない。今からでも止めなければ。

教室を出たところで、彼は廊下の先に木村を見つけた。間に合わなかった。これだけ離れていても、わかる。木村の姿は、うまくいかなかったことを物語っている。彼は、心底悔やんだ。しかし、悔やんでも結果は変わらない。教室に向かって歩く木村との距離だけが、段々と変わっていった。

何と声をかければいいのかわからない。木村も目の前で立ち尽くしている。外では部活動に取り組む生徒の声飛び交い、舞い続けている雪は窓を白く染めている。それらは遙か遠くの出来事のように、この場は静寂に包まれていた。ふと、木村が手紙を取り出した。これは代筆したラブレターだ。渡さなかったのだろうか。木村は顔を上げ、泣き顔のような笑顔のような、引きつった顔で言った。

「言いたいことがあるなら直接言ったって言われて、手紙も読まずに返されたよ。それで俺は何か恥ずかしくなって。何も言えなかった。今の俺には、好きだとか言う資格はないんじゃないかって思ったんだ」

木村は気付いてくれた。相手のコが気付かせてくれたんだ。

「次は、思い切り笑えるといいな」

「うん、うん。好きってのがどういうことかわかったら、今度は俺、自分でちゃんと話すよ。はは、悔しいなあ」

木村は笑いながら、涙をこぼしていた。彼は木村の肩を軽く叩き、黙ってその場を離れて行った。

何かがあつた

クリスマスが夢だったかのように、佳代はまた、彼と手紙でのやり取りをしていた。クリスマスはあんなに話せたのに、やっぱり、堂々と会って話せない。そんな日々が続く。

最近、由美は少し元気がない気がする。一緒に帰ることも少ない。たまに、避けられていると感じる時がある。何か隠しているのかも知れない。隠したいことを無理に聞こうとは思わない。由美を信じているから。話してもいいと思つたら、きっと由美から話してくれるよね。それまで待つよ。

佳代は視線を彷徨わせ、何度も彼の姿を探す。もう部活動は始まっている。学校には来ていたから体調は悪くないはずだし、今まで彼は遅刻したことがない。由美は少し遅れて来たけれど、彼のことは何も聞いていないって言っていた。どうしたんだろう。

限界のその先

由美の前には手紙の差出人がいる。手紙の返事をしたら、呼び出された。このヒトと付き合うことになるなんて。部活動はもう始まっている。校舎裏だから人気ひびはないけれど、こんなところを誰かに見られたらまずい。変な噂が立ってしまう。好きでもないヒトとの噂なんて立って欲しくない。

「じゃ、週末な」

デートの約束。断ることはできない。せめてもの抵抗で返事はしなかったけれど、相手は断れないことがわかってる。部活動に行かないきゃ。佳代に心配かけないように、普段通りに行きなきゃ。

眞実

彼は、体育館へ向かつて走っていた。今日は雪が舞っているから、室内練習のほすだ。木村のことがあつて、部活動の開始時刻はかなり過ぎている。近道の校舎裏を通つて行こうとすると、由美を見つけた。男子と話しているようなので、思わず柱の陰に隠れてしまった。遠くて、話し声は聞こえない。元より盗み聞きするつもりはないが、もう一度由美を見やり、胸が痛む。自分は佳代と付き合つていて、由美とは関係ない。それでも、由美への想いはずっと変わらなすし、走り高跳びの練習中は由美と二人だけの時間を過ごしてきた。何だか、誰かに由美を取られたような気分になる。由美との時間があるのは当たり前前思つていた。実際、今まですつと、当たり前のようにあつた。でも、それは当たり前前のもものではなかつた。そんなことに今更気付く。由美が遠くへ行つてしまつたような気がした。男子が去つて行く。それを見て、自然と足が由美の方へと向かう。半分ほどの距離まで来たところで、由美は走つて行つてしまつた。部活動へ行つたのだらう。慌てていたのか、何か落として行つた。いくつかのものが舞つていす。風で舞うくらいだから、紙だらうか。大事なものだ困るだらうから、後で渡してあげようとそれを拾い上げる。それは、四通の手紙と、一枚の写真だつた。三通の差出人は自分になつていす。封筒もないので、内容も目に入る。由美を悩ませていたのはこれかも知れない。そして、四通目を見て確信した。写真の意味も理解した。

四通目の差出人は、祐一。

いつも見ていた顔 見たことのない顔

佳代は不安で仕方がなかった。彼が怪我をしている。昨日学校で見た時は何ともなかったのに。昨日、彼は結局部活動には来なかった。何か関係があるのかも知れない。これまで、部活動に遅れたことも休んだこともなかった彼が、無断で休んだ。顔にあんな怪我をするなんて、嫌な想像しか浮かばない。どうしたのか聞きたいけれど、やっぱり勇気が出せない。彼に話しかけることができない。仕方なく、佳代は手紙に想いを託し、由美に預けた。

ほっとする瞬間

ない。どこを探しても、ない。由美は昨日の行動をもう一度振り返る。祐一と話していた時までには間違いなくあった。その時に落としたんだろうか。でも、校舎裏をいくら探しても見つからなかった。他の場所で落としたんだろうか。心当たりは全部探したのに。誰かに拾われてしまったらどうしよう。

結局、どこにも祐一からの手紙と写真はなかった。もう、誰にも拾われていないことを祈るしかない。気持ちを切り替えて、いつも通りに部活動に行かなきゃ。

種目別練習の時間がきた。昨日は彼がいなかったから、ちょっと寂しかったな。佳代も心配していたけれど、近くで見ると結構怪我はひどいかも。大丈夫なのかな。

「随分格好良くなったね」

「だろ。ファンになる？」

「大丈夫なの？それ」

「結構周りは騒いでたけど、大したことないんだよな。物珍しいだけだろ」

顔が腫れていて、唇が切れていたら、殴られたとしか思えない。

「昨日は何で休んだの？珍しいよね」

「ボクシング始めたんだ」

嘘にしか聞こえない。喧嘩かな。そういうのとは無縁なヒトだと思っ
っていたんだけれど。

「佳代が心配してるよ。本当にボクシングやるなら、顔を殴られな
いくらい強くなって」

「ちよつと聞いていいかな？」

「うん。何？」

「参考までに教えて欲しいんだけど、どんな男に惚れる？」

「何バカなこと言ってるの」

こういう質問やめて欲しい。どう答えていいかわからないんだから。
「俺は真剣なんだ」

顔は笑っている。

「はいはい。私はね、白馬に乗った王子様が迎えにきてくれるからいいの」

「じゃあ、もし王子が来なかったら？」

真面目に返されるとちよつと恥ずかしい。どんな男のヒトがいいかなあ。

「夢のあるヒトかな。あと、面白いヒト」

真剣に答えちゃった。

「俺はいかがですか」

「ちよつと役不足ですねえ」

本当は好きなんだけれど、当然、言えない。

「あかさ」

彼の目が変わった。何で？このタイミングでこういうのやめて欲しい。どきどきする。

「今日は獅子座の女のこの悩みが解決する」

「は？私のこと？」

「さあ？獅子座なの？」

何だか遊ばれているような気がして悔しい。

「もついい。で、何でわかるの？」

「夢でお告げがあったんだ」

「言つと思つた。でも、ありがと」

本当に安心するから不思議。あんなに悩んでいたのも、この時間は忘れてしまう。でも、この時間が終わったら現実と向き合わなければいけない。この時間がずっと続けばいいのに……なんて望んだら佳代に怒られるよね。

女が意地を張るなら男は体を張る

祐一を校門の向こうに見つけた。部活動はサボリか。彼は自分も今日は休むことを決めた。学校から遠ざかりながら、徐々に祐一の距離を詰める。祐一の他に二人いる。名前は知らないが、同じ学年の男子だろう。そういえば陸上競技部顧問の先生が言っていたことがある。

「喧嘩はするなら絶対に負けるなよ。自分が一人の時に相手が二人以上いたら、逃げる。漫画じゃないんだから、まず勝てんぞ」

まず勝てん、か。逃げる訳にはいかない時はどうすればいいのかは言っていないかったな。今日学ぶしかないな。痛いんだろうな……。

「祐一。ちよつと時間いいか？」

三人が振り返る。祐一が口を開く。

「よう。クラブふけるなんて珍しいな」

先に確かめておかなければ。

「なあ、どうやって佳代とデートしたのか教えてくれよ。俺が誘ってもうまくいかないんだよ」

「はは。どうって普通に誘っただけだよ」

やっぱり祐一だったのか。由美への手紙とやり方が似ていたから、まさかとは思ったが。それなら景子や真紀子と出かけた時に誘われた理由も納得がいく。佳代と付き合っていることを広めたのも祐一で間違いない。本気で想いをぶつけていたなら、仮に佳代や由美が祐一と付き合ってもそれが恋愛だって納得もできた。でも、そうじゃない。やり方が汚いんだよ。こそこそ邪魔ばかりしやがって。佳代も、由美も、すごく苦しんでいる。

「用事、それだけか？ だったらもう行くぞ」

佳代も、由美も、こいつが！

「待てよ」

「まだ何かあるのか？」

「これ以上、佳代と由美に余計なことをするな」

「は？お前に関係ないだろ。行くぞ」

「逃げるなよ」

「調子に乗るなよ。喧嘩売ってんのか？」

「やっぱりこうなるんだな。覚悟を決めるか」

「約束するのか、しないのか、答えろ」

「おい、祐一。面倒くせえよ。やろうぜ」

「やっぱり三対一か。やり方が汚いんだよ」

先生の言う通りだったな。勝てない。

「わ、わかった。約束する。もう佳代と由美には手を出さない。だから、放せって」

やっと約束したか。

「破ったら、今度は許さないからな」

「わかったって。だから、もう放せよ」

三人が離れて行く。ああ、終わったら急に痛い。これはまずいぞ。

絶対に明日までには治らない。やっぱり祐一が一人の時にすれば良かった。祐一以外は無視していたせいで、後ろからやりたい放題やられたからな。骨とか異常ないだろうな。ああ、痛い。喧嘩なんて初めてしたが、こんなものするもんじゃない。帰って手紙でも書こうかな。

翌日、彼の周りには一日中野次馬が絶えなかった。職員室にまで呼ばれてしまった。親戚のボクシングジムに体験入会したことにして、何とか誤魔化した。祐一達も、顔じゃないところを殴ってくれば良かったんだ。治るまでしばらく落ち着かないんだろうな。

「随分格好良くなったね」

由美が言う。この二人の時間は大切にしないと。いつもながら、ほっとする。

「だろ。ファンになる？」

「大丈夫なの？それ」

かなり痛い。でも、大丈夫じゃないとは言えない。

「結構周りは騒いでたけど、大したことないんだよな。物珍しいだけだろ」

「昨日は何で休んだの？珍しいよね」

一応、職員室での話に合わせておいた方がいいかな。

「ボクシング始めたんだ」

「佳代が心配してるよ。本当にボクシングやるなら、顔を殴られないくらい強くなって」

それは無茶だろう。本当にはやらないから関係ないが。そんなことより、聞かなくては。

「ちよつと聞いていいかな？」

「うん。何？」

今日はちよつと素直だ。助かった。

「参考までに教えて欲しいんだけど、どんな男に惚れる？」

「何バカなこと言ってるの」

うまく聞けない。参ったな。

「俺は真剣なんだ」

「はいはい。私はね、白馬に乗った王子様が迎えに来てくれるからいいの」

「じゃあ、もし王子が来なかったら？」

「夢のあるヒトかな。あと、面白いヒト」

なるほど。祐一は、ないか。万が一、由美が祐一のことを想っていたとしたら、余計なことをしていたのは自分の方になってしまふ。

昨日は頭にきていたせいで、そこまで考えていなかったから、一安心だ。

「俺はいかがですか」

「ちよつと役不足ですねえ」

冗談だとわかっていても傷付くな。たまには世辞でもいいから言うてみて欲しい。

「あのさ」

あとは、由美をうまく安心させなければいけない。

「今日は獅子座の女の口の悩みが解決する」

「は？私のこと？」

そう。ちゃんと伝わったか。良かった。

「さあ？獅子座なの？」

「もういい。で、何でわかるの？」

「夢でお告げがあったんだ」

「言っと思った。でも、ありがと」

少し笑顔が柔らかくなったかな。そうやって笑っている由美が好きなんだ。

何もなかったかのように

佳代は彼からの手紙を開けた。

「怪我は大したことないよ。心配かけてごめん。大丈夫だから。ありがと」

そんなことないと思うんだけど、心配させないように気を遣ってくれてるんだね。無茶しないでね。

「由美のことは、気のせいじゃないかな。何か困ったらちゃんと話すんじゃない？」

確かに、由美は前みたいに戻った。元気がないような気がしたり、避けられてるような気がしたのは、気のせいだったのかな。でも、今は由美が元気にいるんだから、それが嬉しいな。

「どうしても直接話したいことがあるから、会ってもらえないかな」
「どうしよう。恥ずかしいよ。でも、そこまで言うんだから大事な話だよ。ああ、でも恥ずかしいよ。もう少し待って。きっと、克服する。堂々と彼の前に立てるように。」

救ってくれたヒト

由美は下駄箱を見て動きを止めた。たくさん入っている。手紙が五通と、写真が一枚。四通の手紙と写真には見覚えがあった。祐一が拾ってここへ？今更何で？大体、デートの約束は済んだのだから、今祐一が五通目を出す理由がない。五通目には差出人が書いてない。「週末は用事ができたから、デートの話はなしだ。気持ちも冷めたから付き合う話はなしだ。もう、手紙も出さない」
詰めが甘いよ。この字は知ってるんだから。

(ボクシング始めたんだ)
やっぱり嘘なんじゃない。

(今日は獅子座の女のコの悩みが解決する)
何バカなこと言ってるの。

(夢でお告げがあったんだ)
嘘ばかり。ずるいよ、こんなの。黙って助けてくれて、隠してた
ら、お礼も言えないじゃない。バカじゃないの。

「ありがとう……」

本当は最初から

もうすぐ二年も終わってしまふ。道德の授業で「今年度を振り返って」という作文を書く振りしながら、彼は考え込んでいた。以前木村の想いを伝える時に、引つかかったこと。好きというのはどういうことか。自分はそれがわかっていたんだらうか。本当は自分もわかっていないんじゃないのか。佳代のことをどう想っているのかを考えてみる。例えば顔。可愛いとは思うが、可愛いコは他にもいる。性格は？佳代は恥ずかしがりだが、芯をしっかりと持っていて、行動力がある。とはいえ、それも、他にもそういうコはいるだらう。景子に告白された時、付き合っているコがいて、そのコのこと好きだから、と断った。佳代のことには本当に好きだと思っていたし、景子のことには好きだと思つてはいなかった。景子だつて可愛くない訳ではないし、行動力もあつた。何が違うんだらう。由美はどうなんだらう。由美も可愛いし、明るくて、周りを気遣う優しいコだ。わからない。こういう基準で好きだというのなら、周りのほとんどのコが好きだということになってしまう。佳代と由美のことは好きなのに、他のコに対してはそう思わない。佳代と由美のどちらが好きなのか。どちらも好きなのだから、優劣などない。好きっていうのはどういうことなんだ。由美と佳代の共通点は何なのか。他のコとの違いは何なのか。必ずあるはず。そもそも、好きだと感じたのはいつだっただらう？由美は部活動と一緒に練習したり、会話をしたり、そうやって時間を共有する中で好きになった。由美の声を聞き、笑顔を見ると、ほっとする。一緒にいたいと思う。そう。そばにいてほしい、一緒にいたい、そう思うのが他のコとの違いなんだ。佳代のこと好きだと感じたのは？はつきりと思いつけない。好きだから付き合っているはずなのに、思い出せない。でも、佳代の想いに何度も支えられて、そばにいてほしい、一緒にいたい、そう思っている。なぜ、佳代を好きになつた時期を思い出せないん

だろう。由美との違いは何なんだろう。佳代と共有している時間は、手紙のやり取り……そうか。佳代のが好きだったから付き合っているんじゃない、付き合っていたから好きになったんだ。そんなことに今更気付くなんて。

佳代に伝えなければならぬ。この先付き合っていく資格は自分にはないと。佳代のが好きなのは間違いない。それでも、それは佳代の好意に甘え、自分の気持ちを偽り、想いを一方的に受け取ってきた期間があったからだ。佳代の想いが離れた時、佳代のことを好きでいられる自信がない。それは、本物の想いじゃない。自分の気持ちを、佳代と、由美に伝えたい。

純粹

佳代は、未だ決心できずにいた。あれから何度も彼からの手紙には会って話したいと書かれていた。そのたびに、もう少し待ってと返事をしてきたけれど、あまりに待たせ過ぎている。それでも、恥ずかしいという気持ちはどうにもならない。大事な話だと思えば思うほど、恥ずかしさも大きくなってしまふ。由美も一緒になら大丈夫かな。彼と由美に相談してみようかな。すごく大事な話なんだろうけれど、ずっと一緒にいてくれて、ずっと見守ってきてくれた由美になら話してもいいよね、きつと。

その代償は大きくて

春の陽気が垣間見えている。冬は去り、もうすぐ三年生になる。由美の嫌いな冬期の練習も終わり、種目別練習の時間になっていく。

「ねえ、最近ずっと佳代が困ってる」

「俺のせいだろ？」

「佳代はそう思っていないけどね」

「大体理由は聞いてるんだろ？」

「うん。まあね」

「何か佳代に頼まれたのか」

相変わらず鋭いなあ。隠しても仕方ないか。

「佳代と話したいっていう話は、私には話せないことかな？」

「由美にも話すつもりだけど、まず佳代に話す。由美からの伝言じゃ駄目なんだ」

順番が関係あるの？結局話すなら同じような気もするんだけど。

「ん〜一緒にならどう？佳代もそれなら大丈夫って言ってたけど」

「それは俺も手紙で聞かれたよ。でも、駄目なんだ。まず、佳代に話す」

こだわるなあ。どんな話なんだろう。

「とりあえず佳代にはそう伝えるけど、気が変わったら話してね」

「そういう訳にはいかないよ」

ここまで言われると気になるなあ。また今度聞いてみようかな。気が変わって話してくれるかも知れないし。

「あ、この間はありがとね」

「何の話？」

「お陰様で悩みは解決しましたよ」

「そりゃ良かった。俺はお告げを伝えただけだけど」

やっぱり隠すつもりなんだ。

「実は私を助けてくれたヒトは顔を怪我したらしくて」

「そりゃ王子様も災難だったな」

「ねえ、何で隠すの？」

「何を？」

「私、ちゃんとお礼が言いたいよ。手紙をくれたのは貴方だってわかってるんだよ」

「差出人も書いてないのにか？」

「やっぱりそうだ。もう間違いない」

「差出人が書いてないこと知ってるのは、くれたヒトだけだよ」

彼は黙っている。

「ねえ、隠さないで。貴方が隠してる限り、私のお礼は受け止めてもらえないじゃない。私の気持ちが届かないんだよ？ずるいよ」

彼は目を逸らしている。

「私のせいで怪我までして」

「それは違う！俺が勝手にやったことだ。由美のせいじゃない」

何でここまでしてくれたんだろう。胸の奥が熱い。心臓の音が聞こえる。

「ありがと」

彼の気持ちが知りたい。聞きたい。

「ねえ」

駄目。聞いちゃいけない気がする。

「何でそこまでしてくれるの？」

聞いてしまった。もう後戻りはできない。

「好きなコを、護りたかったから」

何かが崩れていく。今まで辛い想いをしてまで支えてきた彼と佳代の関係も、自分の感情を抑えていた壁も、こんな簡単に、一瞬で。

その歯車は3つでは噛み合わない

彼は自分の気持ちに気付いて以来、由美が気になって仕方がなかった。必要以上に意識してしまい、想いはどんどん大きくなっていく。由美と会話するにも、一言一言気をつけていないと、佳代に伝える前に由美に言ってしまうようで、うまく話せない。

「ねえ、最近ずっと佳代が困ってる」

会って話したいってずっと言っているから、そのせいなんだろう。

「俺のせいだろ？」

「佳代はそう思っていないけどね」

「大体理由は聞いてるんだろ？」

「うん。まあね」

由美が何か言いたそうにしている。

「何か佳代に頼まれたのか」

「佳代と話したいっていう話は、私には話せないことかな？」

由美に想いを伝えるには、きちんと佳代と話してからでないと、本当に伝えることはできない。何より佳代には、ここまで自分を支えてくれたことにお礼を言っつて、ここまで傷付けたことに謝るべきだ。

「由美にも話すつもりだけど、まず佳代に話す。由美からの伝言じや駄目なんだ」

「ん〜一緒にならどう？佳代もそれなら大丈夫って言ってたけど」
佳代に気持ちを伝えれば、どのような形に受け止めたとしても傷付けるのは間違いない。その場に由美がいたら、佳代は怒ることも泣くこともできないだろう。きちんと、自分と佳代と、一対一で本当の想いを伝え合わなければならない。

「それは俺も手紙で聞かれたよ。でも、駄目なんだ。まず、佳代に話す」

「とりあえず佳代にはそう伝えるけど、気が変わったら話してね」

「そういう訳にはいかないよ」

少しの間を置いて由美が言った。

「あ、この間はありがとね」

「何の話？」

「お陰様で悩みは解決しましたよ」

祐一の件か。本当に良かった。

「そりゃ良かった。俺はお告げを伝えただけだけど」

「実は私を助けてくれたヒトは顔を怪我したらしくて」

何で知っているんだ。祐一達が言うはずはないし、他は誰も知らないはず。

「そりゃ王子様も災難だったな」

「ねえ、何で隠すの？」

それはもちろん……何でだろう。何でこんなに必死で隠しているんだ。

「何を？」

「私、ちゃんとお礼が言いたいよ。手紙をくれたのは貴方だってわかってるんだよ」

何か確信があるような言い方だ。

「差出人も書いてないのにか？」

「差出人が書いてないこと知ってるのは、くれたヒトだけだよ」
しまった。もう言い逃れはできない。いや、そもそも言い逃れる必要なんてあったんだらうか。

「ねえ、隠さないで。貴方が隠してる限り、私のお礼は受け止めてもらえないじゃない。私の気持ちが届かないんだよ？ずるいよ」

由美への想いが抑えられない。このままでは言ってしまう。わかっているのに。

「私のせいで怪我までして」

「それは違う！俺が勝手にやったことだ。由美のせいじゃない」

「ありがと」

由美の笑顔。その笑顔を護りたくて。そばで笑っていて欲しくて。祐一が赦せなかった。

「ねえ」

雰囲気が変わる。時間が止まる。この感覚は知っている。この後、気持ちや聞かれる。答えてはいけない。そうだ。由美への想いを隠すために、祐一の件も隠していたのに。言うな。まだ佳代にもきちんと話していない。由美への想いは出してはいけないんだ。

「何でそこまでしてくれるの？」

ああ。もう駄目だ。この想いを抑えることなんて、できない。由美に、伝えたい。

「好きなコを、護りたかったから」

最低だ。もう、取り返しはつかない。

最後の手紙

由美が前のように元気になって以来、以前のように佳代は由美と一緒に帰るようになっていた。先にクラブ活動を終えた佳代は、校門で由美を待っている。彼と直接会って話す勇氣は相変わらず出せなくて、由美が三人での会話でも良いか確認してくれることになっている。でも、相当大事な話みたいだから、やっぱり二人じゃないと無理かなあ。こちらに歩いて来る由美が見えた。落ち込んでいたみただから、やっぱり駄目だったんだ。

由美は俯いたまま、動こうとしない。佳代は黙って待ってみただけれど、由美はずっと俯いたまま、動かない。ふと、由美が震えていることに気付く。

「由美？」

覗き込んで、気付いた。由美は泣いている。

「佳代！ごめんね……ごめんね」

「由美、何があったの？落ち着いて」

もう、由美の声は言葉にはならなかった。そのまま泣き崩れていく由美を、佳代は静かに見守った。

由美を家まで送る途中、ゆっくりと話す由美の言葉を佳代は受け止めた。涙が溢れそうになる。でも、今、泣いてはいけない。由美の涙の意味はわかる。今、自分にできるのは泣かないこと。絶対に由美に涙を見せちゃいけない。

自分の部屋に着いた佳代は、もう限界だった。胸のあちこちが痛む。押し出されるように涙が溢れ、止まらない。彼の笑顔が、彼の声が、彼の手紙が、頭に、耳に、心に、響き渡る。彼との距離が、こんなに遠かったなんて。彼も、由美も、苦しんでいた。自分が逃げていたせいで、苦しめていた。彼は伝えようとしてくれていた。由美はずっと想いを抑えてくれていた。もう、逃げてはいけない。

彼に会って、ちゃんと話さなきゃ。佳代は彼への最後の手紙を書いた。

翌日、彼の下駄箱へ手紙を入れ、由美を呼び出した。

「私、明日ちゃんと彼と話すよ。彼の気持ち聞いてくる。今まで、辛い思いさせて、ごめんね。由美の気持ちに気付かないで、私、ひどいことした。私はもう大丈夫だから。由美。私のことはもういいから。今度は自分のことちゃんと考えて。自分に素直になって」
由美は何も言わなかったが、泣きながら頷いてくれていた。

「二回目の「お待たせ」

彼との約束の場所。彼は先に待っていた。

「お待たせ」

彼に初めて言った日が嘘のように、悲しく響く。彼は、黙っている。いや、言葉を選んでるように見える。

「私、頑張ったよ。勇気を出して、ここまで来たんだよ。だから、思ってること、ちゃんと話して」

涙が溢れそうになる。泣かないって決めていたのに。

「俺は、由美のことが好きだ」

もう、止められない。涙が頬を伝って、落ちていく。彼の目からも涙がこぼれ出した。

「何度も佳代に支えられて、何度も佳代に励まされて、俺は自分の気持ちに気付くことができた。振り返ってみて、わかったよ。最初は、俺の中に佳代への想いはなかったんだ。恋に憧れて、佳代の想いに甘えていた。佳代の想いは、俺の居場所だった。だから、今ならはつきりと言える。佳代のこと好きなんだと。けど。佳代から与えてもらった想いで佳代を幸せにはできない。俺は、このまま付き合っていくことは、できない」

終わり、なんだ。本当に。わかっていたはずなのに。笑わなきゃ。

彼の想いを、応援してあげなきゃ。

「佳代。……今まで、ありがとう」

ちゃんと、答えなきゃ。返事しなきゃ。笑顔で別れなきゃ。彼が進むために。

「今まで、ごめ」

「言わないで。今までありがとう。嘘でも、好きって言ってくれて嬉しかった。由美は本当にいいコだよ。きつと、うまくいく。大切にしてあげてね」

もう、これ以上何も言えない。笑顔でいられるうちに行かなきゃ。

たくさんの想いを、
ありがとう。
幸せだったよ。
さよなら……

親友と思いやり

校門で佳代が待つている。行かなければならないのに、由美の足はなかなか進まない。やつとの思いで校門にたどり着いても、由美は佳代の顔を見られなかった。何を話していいのかわからない。何て言えばいいのかわからない。佳代に、どうやって顔を向けられないのかわからない。何てことをしてしまったんだろう。

「由美？」

佳代の声を聞いた瞬間、涙が溢れ出した。

「佳代！ごめんね……ごめんね」

「由美、何があつたの？落ち着いて」

ちゃんと、話さなきゃ。何があつたのかを。

まだ気持ちは落ち着かない。昨日は、佳代にひどいことをしてしまった。それなのに、佳代は話を聞いてくれて、家まで送ってくれて、泣き止むのを待っていてくれた。今日、これから佳代が話があるって言うけど、どんな顔して会えばいいんだろう。佳代が近付いて来る。顔が上げられない。

「私、明日ちゃんと彼と話すよ。彼の気持ち聞いてくる。今まで、辛い思いさせて、ごめんね。由美の気持ちに気付かないで、私、ひどいことしてた。私はもう大丈夫だから。由美。私のことはもういいから。今度は自分のことちゃんと考えて。自分に素直になつて」
佳代の言葉を一つ一つ受け止め、ただ頷くことしかできなかった。今まで、佳代を支えなければという思いから、自分の弱い姿は見せまいとずっと気を張ってきた。けれど、今はただ、佳代の気持ちにすがって泣き続けた。

その笑顔に支えられて

佳代とは何も話していないにも関わらず、勢いに任せて由美に想いを漏らしてしまったことを、彼は後悔していた。しかし、どれほど後悔しようとして、もう、遅い。昨日はあの後由美と話することもできず、佳代に会うこともできなかった。何をどうすれば良いのか、全くわからない。今日の部活動の時間まで待って由美と……いや、今、由美と話しても駄目だ。やはり、何とか佳代ときちんと話す方法を考えなければ。

学校に着いて下駄箱を開けると、見慣れた封筒が入っていた。これは、佳代からだ。

「明日会おう。話したいこと、何となくわかるよ。思ってること全部話してね」

佳代にも、昨日のことは伝わっているのだろう。それでも、自分の口から、はっきりと佳代に伝えなければならぬ。ここまで、自分を支えてくれた大切なコなのだから。

翌日、約束の場所で待っていると、佳代が来るのが見えた。

「お待たせ」

佳代が「お待たせ」と初めて言った日を思い出す。あの時のはにかんだ表情とは違う、強い眼差しと、しっかりとした笑顔。全てを受け止める覚悟が伝わってくる。言えるのか？佳代のが好きなんだぞ？それでも、別れを選んで、傷付けて、由美への想いを、言うことができるのか？

「私、頑張ったよ。勇気を出して、ここまで来たんだよ。だから、思ってること、ちゃんと話して」

佳代の声が震えている。あの佳代が、目を逸らすことなく、顔を合わせて微笑んでいる。そうだ。ずっとそうだったじゃないか。不安になつたり、弱気になつたり、そんな時はいつも、佳代が支えてくれた。救ってくれた。

(自分を責めないで。私は信じてるよ)

(私も不安だけど、貴方のこと信じてるから聞かないんだよ。だから、私のことも信じてほしい)

話したいのはこっちなのに、辛いのは佳代なのに、それでも声を震わせながら、支えてくれている。最後まで佳代の想いに甘えていたんだな。ありがとう。佳代。

「俺は、由美のことが好きだ」

佳代の頬を涙が伝う。それでも、笑顔を崩さない。見てわかるほど、震えている。佳代、ごめんな。

「何度も佳代に支えられて、何度も佳代に励まされて、俺は自分の気持ちに気付くことができた。振り返ってみて、わかったよ。最初は、俺の中に佳代への想いはなかったんだ。恋に憧れて、佳代の想いに甘えていた。佳代の想いは、俺の居場所だった。だから、今ならはつきりと言える。佳代のこと好きなんだと。けど。佳代から与えてもらった想いで佳代を幸せにはできない。俺は、このまま付き合っていくことは、できない」

佳代はくしゃくしゃの笑顔で、何かを言おうとしてくれている。もう、いいんだ。無理しなくて。佳代の想いは伝わっているから。

「佳代。・・今まで、ありがとう」

別れるんだな、佳代と。こんなに支えてくれて、想ってくれている佳代と。もう、自分だけに微笑みかけてくれる佳代はいなくなるんだな。最後の最後まで、こんなに想いをくれて。その笑顔は、絶対に忘れない。

「今まで、ごめ」

「言わないで。今までありがとう。嘘でも、好きって言うてくれて嬉しかった。由美は本当にいいコだよ。きつと、うまくいく。大切ににしてあげてね」

佳代が、横を通り過ぎていく。徐々に足音が遠ざかる。振り返ることはできない。佳代は横を過ぎるその時まで、ずっと笑顔でいてくれた。どんなに涙が流れても、どんなに体が震えても。辛いのを我

慢するのは、もう、十分なんだ。これ以上、自分のために佳代を苦しめてはいけない。ありがとう、佳代。

失ったものと新たな決意

校庭にも桜が咲き誇り、舞い散る桃色の花びらが春を精一杯告げている。三年生ともなれば、進路を実感し、慌てる生徒も増える。彼は、以前にも増して、部活動に打ち込んでいた。今更勉強で慌てているのは、普段からサボっていたか、学力の大切さに気付くのが遅かったか、どちらかだろう。彼は授業時間を有効に使っているので、今更慌てる必要はない。

佳代や由美との距離もようやく落ち着き、由美とは以前のように会話ができている。佳代は少し変わった。以前よりも、会話するこゝとが増えた。それは、佳代の中から特別な感情が消えたからだろう。はにかんだり、俯いたりすることはもうない。他の男子へのそれと変わらない。

手紙のやり取りがない寂しさには、まだ慣れることができない。その中にいる時は、あるのが当然だと思ってしまっから、大切さに気付かない。それほど、佳代の想いは大きいものだったのだろう。佳代も納得できるほどの、本物の想いを由美に伝えなければ。妥協は許されない。

やっぱりここが好き

由美は、少し困っていた。彼の気持ちは聞いたものの、はっきり何かを確認した訳じゃない。付き合っている訳でもなく、告白をした訳でもなく、された訳でもなく、宙ぶらりんの状態が続いている。普通に会話はできるけれど、そういう話を切り出しにくい。彼の練習態度があまりに懸命で、話しかけることさえもためらってしまうことがある。彼は、何か考えてくれているのかな。

「ねえ、最近頑張り過ぎじゃない？無茶すると体壊しちゃっよ」

「愛に目覚めたんだよ」

「えっ？ちよ、ちよっと」

「走り高跳びへの」

彼の気持ちを聞いてしまったからは、変に意識してしまって、前みたいな反応ができない時が多い。彼は相変わらずで、何か悔しい。

「へえ。私とどちらがお好みですか？」

お返し。たまには慌ててみてほしい。

「今は走り高跳びですかね。俺には俺の考えがありまして」

冗談で言ってるんじゃないかってわかる。ちゃんと考えてくれてるんだね。だったら、それまで待たなきゃ。

「今年は結構上を狙えそうだね」

「まあ、進路かかってるから」

そういう動機で頑張るヒトじゃないのは知ってる。

「スポーツ推薦狙ってるの？」

「必要ならね」

「勉強できるんだから必要ないでしょ」

「ま、先のこととはわかんないだろ。さて、練習に戻りますか。夢は全国制覇！」

二年かけてできた居場所

陸上競技の地区予選まで、あと二週間。入賞できなければ、そこで終わり。彼は、練習と休養の管理を大会の日に合わせて調整した。

「結局後輩もできず、最後まで二人きりだったな」

「変な言い方やめて」

「ちよつと聞いていいかな」

「ちよつとならね」

「祐一が撮った、俺と写ってる写真あった。あれ、まだ持つてる?」

「何で?」

「後輩がお守りくれるって言うのを断ったんだけど」

「だから?」

「言わせるの?」

「言つて」

「お守りにするから貸してくれよ」

「もう、ないよ。残念でした」

「じゃあ、新しいのを作らせてくれ」

「いいじゃない、そんなの。日頃の行いが悪いんだから、神様も助けてくれないでしょ」

「俺は最初から神様なんて信じてないよ」

「そんなんでお守りの意味あるの?」

「俺はちゃんと感じられる想いを信じてるんだよ」

「ガンバツテ。オウエンシテルワ」

「もう一回」

「言いません。一番近くで努力を見てきたんだからわかる。大丈夫。自分を信じなさい」

分かり合い 通じ合い

地区予選まで、あと一週間。結果を出せなければ引退の三年生は、表情が違う。

「もうすぐ引退かあ」

「由美。引退はまだまだ先だろ」

「貴方はそうだろうけど、私の引退はもうすぐ」

「何バカなこと言ってるの」

「何それ。私の真似？似てないよ」

「今度の週末は長髪でA型の女のコが力を発揮する」

「夢でお告げがあったんだ」

「正解。結構似てるぞ」

「神様信じてないんでしょ」

「お告げくれるのは神様じゃないんだよ」

「誰がくれるの？」

「さあ？白馬の王子様かもな」

「何で私の夢には出て来ないのかなあ？」

「そのうち出てくるよ」

「何でわかるの？」

「俺が王子様だから」

「何バカなこと言ってるの」

約束

地区予選まで、あと三日。

「よし。賭けよう」

「また急に意味のわからないことを言う」

「地区予選の成績に」

「何を賭けるの？」

「キヌとかどう？」

「優勝したらね」

「そんなに安売りしたら駄目だろ。俺は地区予選絶対優勝するぞ」

「冗談だからね」

「期待させるんじゃないよ」

「期待したの？」

「聞きたい？」

「いい。優勝できなかったらどうする？」

「どうしてほしい？」

「付き合ってもらおうかなあ」

「そりゃ駄目だ。わざと優勝逃さなきゃなんないだろ」

「冗談だからね」

「賭けになんないなあ」

「学生が賭け事なんてけしからん」

「その通り。ただの約束にしよう」

「優勝するって？」

「俺じゃないよ」

「私がするの？優勝は無理だよ」

「まだ引退しませんって」

「頑張ってみるね」

通過点

地区予選当日。新人生にとっては初大会となることも多い。三年生は一部が引退試合となる。天候は快晴で、雲一つ見当たらない。風は穏やかで、絶好の日和だ。全ての選手が、それぞれの想いを胸に努力の成果を競う。最初から強い選手なんて存在しない。才能があるから強いと言われている選手は、才能に努力を重ねているから強いんだ。勝ちたいのなら、それ以上の努力が必要なのは当然のこと。勝ちたいという想いが、本当に強かった選手が勝つ。

彼は優勝に加え、全国大会参加資格を手にし、由美は二位入賞した。

頑張れる理由

県大会まで、あと二週間。

「本当に優勝したね」

「俺は約束は守るんだ」

「優勝する約束しなかったでしょ」

「由美が引退しなかっただろ」

「たまたまね。運が良かったんだよ」

「助かったよ」

「何で？余裕で優勝したじゃない」

「由美が引退しなくて、だよ」

「それはそれは。ありがとうございます」

「由美と話していると元気になるんだ」

「何バカなこと言ってるの」

「話し相手がいなくなると寂しいだろ」

「私じゃなくてもいいってことじゃない。引退しようかな」

「冗談だよ。引退しないで。一生のお願い」

「こんな若い内に一生のお願いを使うのはやめた方がいいですよ、

旦那」

「この願いが叶うなら、この先使えなくなってもいい」

「お願いだから、真剣な顔で言うのをやめて」

最期を過ぎても届く想い

県大会まで、あと一週間。

「今度は何か賭けようか」

「キスはダメ」

「先に言うなよ」

「今度も優勝するでしょ」

「それはそうだけど、張り合いが欲しいじゃないか」

「すごい自信だね。今度はそんなに簡単じゃないでしょ？」

「そりゃ簡単に優勝はできないよ。でも優勝する」

「それだけ自信があるなら、お守りはいららないかな？」

「ぜひ下さい」

「素直でよろしい。私からじゃないけどね」

「それ、マフラー？」

「佳代が編んだんだよ。去年のクリスマス前から編んでたんだから」

「これ、俺が持っていていいのかな？」

「最初からそのつもりで編んだのはわかるでしょ。渡すつもりはなかったみたいだけど、私が無理やり預かってきたの。ご利益抜群でしょ？」

「それはもちろんそうだけど、罰が当たったりしないか？」

「何で罰が当たるの？」

「嫉妬とかで」

「何バカなこと言ってるの」

そばにいて欲しいから

県大会まで、あと三日。

「今日はあまり喋らないんだね」

「もうすぐだからな」

「緊張とか、するんだ？」

「そりゃあしますよ。俺はシャイなんで」

「シャイって意味知ってる？」

「天才と紙一重」

「バカじゃないの」

「頼みがあるんだけど」

「キスはしません」

「全国大会、応援に来てくれない？」

「それは難しいなあ。今年は開催地遠いから旅費が高いもん」

「俺さ、最近商売始めたんだよ」

「それはそれは。儲けたらおごってね」

「俺を助けると思ってる、買ってくれない？」

「どうせ親切でしょ。いらない」

「今回の賞品は目玉ですよ、お客さん。いくらなら買ってくれる？」

「はいはい。百円出してあげる」

「よし、売った。約束だから買ってくれ」

「で、今度は何をくれるの？」

「全国大会の旅費と宿泊費」

「それ百円っておかしいでしょ」

「選手と、付き添い一人、二人分の費用が学校から出るんだ。付き添いの条件は、選手のことをよくわかっていて、マッサージやストレッチの基本を押さえていて、陸上競技部に所属している者、らしい。条件に当てはまれば、選手が自分で選んでいいってさ」

「もしかして、私を付き添いにつけてこと？」

「そう」

「私がマッサージとかするの？普通そういつのって同性を連れて行くんじゃないの？」

「来てくれるだけでいい。俺以外で走り高跳びやってるのは由美だけなんだから、異性でもちゃんと通るよ」

「………わかった。頑張つてよ」

優勝だから意味がある

県大会当日。各地区から予選を勝ち抜いた選手が集まり、更にレベルの高い技力を競い合う。天候は晴れ。やや強めの風が吹いている。気温は高め。ここで入賞すれば、更に上の地方大会に進むことができる。ただし、その地方大会で入賞したとしても、標準記録を突破していなければ全国大会に出場はできない。標準記録突破には期限もあり、この県大会で全国大会標準記録を狙う選手は多い。全国大会標準記録は、その年に開催された指定大会であればいつ突破しても有効なため、それを果たしている彼にとっては、優勝のことは頭にはない。

彼は優勝し、由美は七位に終わった。

その時は近い

全国大会まで、あと二週間。

「全国大会の付き添いは、大会まで選手をサポートする、なんて話は聞いてないよ」

「俺からは言ってるないな」

「先に言ってるよ。引退したら受験勉強するつもりだったのに」

「俺は由美と話すの結構好きだけど」

「だから何？」

「言わせるの？」

「言ってる」

「無理にとは言わないから、勉強したかったら帰ってもいいよ」

「そこはそうじゃないでしょ」

「言わなくてもわかってるじゃないか」

「全国大会前でも、緊張してるように見えないね」

「俺が大会で緊張なんかする訳ないだろ」

「県大会前はしてたじゃない」

「あれは別のことにだよ。それに、もう覚悟を決めたから緊張はしない」

「何に緊張してたの？」

「秘密」

「珍しいね」

「気になるだろ。そういう作戦なんだ」

「ならないよ。何となく、わかるから」

「作戦を失敗したかな」

「自信ある？」

「どっち？」

「わかるでしょ？」

「あるよ、もちろん」

「利益」

全国大会まで、あと一週間。

「頼みがあるんだけど」

「最近多くない？」

「それだけ由美を信頼してるってことだろ」

「聞けることならいいけど」

「お守りにしたいから、何か貸してくれ」

「何をお守りにするの？」

「何でもいいんだ。ハンカチとか」

「本当にお守りにしたいなら、ちゃんと具体的に指定して。じゃなきゃご利益ないんじゃないかな」

「言ったらちゃんと貸してくれるか？」

「ちゃんと言ったらね」

「本当だな？」

「変なもの言わないでよ」

「変なものって何？」

「変なものは変なもの。で、何なの？」

「髪留め」

「そんなのでいいの？いつ渡す？」

「当日でいい。当日に付けてた髪留めを貸してくれ」

「髪留めならいくつがあるから、今渡しても大丈夫だよ？」

「それじゃ意味がないんだ。当日、頼む」

全てはこの時のために

全国大会、走り高跳び予選前日。彼と由美は昼前に現地に到着した。宿泊施設を確認したら、その後は自由。彼は、由美を散歩に誘った。

「予選前日から現地入りさせてくれるなんて学校も奮発してくれたもんだ」

「全国大会ともなれば、結構出してくれるんじゃないの」

公園を見つければ、彼はベンチに腰を下ろす。間に二人座れるくらいの距離に由美が座った。

「話があるんだ」

ゆっくりと目を閉じて、もう一度よく考えてみる。ゆっくりと、大きく、一呼吸する。そして、ゆっくりと由美の方を向く。由美はこちらを見て待っていた。

「この三ヶ月くらいの間、色々考えた」

由美と大会に向けて共有した時間を、丁寧に思い出す。

「俺は、やっぱり由美のことが好きだ」

由美はこちらをじつと見つめたまま、続きを待っている。

「俺はまだ子供だから、夢とかよくわからない。けど、俺なりに考えて、由美に想いが伝わるように努力した」

「夢って……そんなの私だってまだわからないよ。どういうこと？」

「夢のあるヒトが好きだって、言ってた」

由美の言葉を思い返す。

「あんな冗談なのか本気なのかわからない言葉のために？」

「言葉が冗談だったとしても、俺が本気だったら、きっと伝わる」

「気持ちはさつき話してくれたじゃない。聞いた時、私」

「待ってくれ、頼む」

今、由美の気持ちを聞く訳にはいかない。

「最後まで聞いてくれ。俺は、由美との時間が大好きで、この先も

ずっと一緒にいられたらいいと思ってる。けど、俺は、佳代に対しても似たようなことを思っていたんだ」

言葉を一旦区切り、自分の決意を確認する。

「由美が想いをくれたから、由美が安らぎをくれたから、だから一緒にいたい、じゃ駄目なんだ。それじゃ佳代の時と同じなんだ。結局由美を幸せにはできない。俺が、自分の意思で、たとえ由美に想われていなかったとしても、それでも由美と一緒にいるために必死になれなかったなら、その想いは本物じゃないんだよ」

由美は言葉をひとつひとつ受け止めてくれている。

「俺は、この大会で優勝する。そうしたら、返事をくれ。由美の気持ちが聞きたい」

「……もし、できなかったら？」

「俺の想いが足りなかったんだ」

「ランキング見たんだよね？」

「参加者の中で六位だったな」

「おかしいよ、こんなの。何で優勝しなきゃいけないの？頑張ってたのは知ってる。そんな記録にこだわらなくてもいいじゃない」

こだわらなければいけないんだ

「それは譲れない」

「どうして？」

「言っただろ。夢は全国制覇だって」

「それこそ冗談でしょ！本気で狙ってなんかいなかったじゃない」

「由美に想いを伝えると決めてからは、ずっと本気だった」

「その気持ちはわかってるから。必死で練習してきたのはわかってるよ」

「由美」

由美がびくつとする。

「俺は、真剣なんだ」

由美はもう、言葉を挟もうとはしない。

「俺は、本気で由美を想ってる。だから、優勝できる。信じてくれ」

「あさつては雨が降る」

由美が言った。あさつては決勝の日だ。天気予報では、雨が降るとは言っていないかった。

「何でわかるんだ？」

「夢でお告げがあったの」

「雨が降るとどうなるんだ？」

「得意でしょ？雨の大会」

励ましてくれているのか。心強い。

「賭けようか」

「何を賭けるの？」

「キスとかどう？」

「優勝したらね」

「約束したぞ」

「冗談だからね」

それが力に

全国大会走り高跳び決勝当日。観客も相当数入り、全国各地の選手が頂点を競う。天候は晴れ。風はなく、高い気温と湿度が体力を奪う。真夏の日差しそのものが照りつける。

「じゃあ、頑張ってくる」

「結構普通なんだね」

「俺が大会で緊張する訳ないだろ」

「そうだったね」

「約束覚えてるか？」

「キスはしません」

「そっちじゃない」

「覚えてるよ。はい」

由美が髪留めをはずして渡してくれる。

「サンキユ。力になる」

「ねえ、何で髪留めなの？」

「俺がお守りにしたいのは髪留めじゃないんだ」

「他には何も渡してないでしょ」

「由美が髪をおろしたのが好きなんだ。そのまま応援してくれ。じゃ、行ってくる」

勝負開始

40人いた参加者も、昨日の予選で12人に絞られている。予選で様子を見た限りでは手強い選手は3人。ランキングで上にいた5人の内、2人は予選で落ちている。ランキングは所詮飾り。実力が拮抗しているならば、結果はその日の調子や環境に左右される。大事な場面に調子を合わせて、環境にうまく適応した選手の勝ちだ。

最初の高さ。緊張しているのか、ほとんどの選手がバーを落としている。三回以内にクリアすれば問題ないが、順位に影響するのだから、一回目で跳ぶに越したことはない。跳躍順が最後の、自分の番が来た。これが難なくクリアできなければ、優勝は遠ざかる。観客席を見回す。すぐに由美を見つける。髪をおろしているから、より見つけやすい。

(見てるよ、由美！)

絶対に負けられない

バーの高さが上がる。最初の高さがクリアできなかった四人はもう挑戦できない。あと八人。例の三人はまだ残っている。最初の高さを一回目でクリアしたのは、自分と、あと一人だけ。この高さでも、次々と選手がバーを落としていく。全国大会の雰囲気にもまれてしまい、実力を発揮できないんだろう。

（俺が大会で緊張なんかする訳ないだろ）

努力した分だけ、揺らがない自信がある。一回目でクリアする。大会の雰囲気を楽しめるのは、強みなのかも知れない。

それだけの時間を繰り返してきたのだから

更にバーの高さが上がる。残っているのは七人。さっきの高さで様子を見る限り、この高さで半分減るだろう。一人目がバーを落とす。二人目は雰囲気呑まれてる。何度も助走をしてはバーの前で止まり、やり直して、と繰り返している。制限時間の一分半を過ぎてしまい、失敗扱いとされる。その後、三人が続けてクリアし、六人目がバーを落とす。やっと順番が回ってきた。この暑さは体力を削られるから、集中力をしっかり保っていないと、小さなミスをする。由美に目をやる。じつとこちらを見守ってくれている。助走でリズムに乗り、ぐっと体を傾けてカーブしながら、踏み切る瞬間にスピードを一気に上に向けてる。体がふわっと浮かぶ。肩がバーを過ぎ、腰がバーの高さまで上がる頃には肩を落としていく。自然と脚が浮かび上がり、綺麗にバーを避けていく。完璧だ。

条件は皆同じ

バーの高さが更に上がる。残ったのは、前の高さを一回目でクリアした四人。予想通りの選手が残っている。競技開始から一時間半が経過し、正午が近付いている。気温と湿度は更に増し、地面近くが揺らめいて見える。こういう時は水分を摂りたくなるが、摂りすぎると発汗を促して、余計に体力を失ってしまう。精神的に飲みたくても、身体的に求めていなければ我慢しなければならない。今は暫定一位だが、一度でも失敗すれば順位は簡単に入れ替わる。優勝が決まるその瞬間まで気を緩めることは許されない。全員がそれを理解している。それでも、負ける訳にはいかない。

闘うなら一緒に

バーが上がる。残ったのは三人。ここが勝負どころだろう。下手をすれば、この高さで優勝が決まるかも知れない。今は暫定一位。まだバーを一度も落としていない。仮に全員がこの高さを失敗したら、優勝する。一人目がシャツを脱ぎ、赤のユニフォーム姿になって助走のスタート位置へ向かう。長めに時間を取っている。バーを越えるイメージを思い描いているのだろう。制限時間ぎりぎりまで使い、助走を開始する。力強い踏み切りだ。残っている三人の中で、一番跳躍力はあるだろう。ぐつと体が跳び上がり、完全にバーを越える。しかし、踵がバーに当たり、地面へと落ちてゆく。失敗だ。二人目は、もう紫のユニフォーム姿で待っている。一人目のせいでリズムが狂ったに違いない。多分、失敗する。助走から乱れている。踏み切り位置がさつきまでとずれている。体はしっかり浮き上がり、失敗。順番が回ってきた。時刻はちょうど正午。暑い。由美を見やる。日陰にいてもいいのに、わざわざ日の当たる場所で見ている。選手はテントがあるから順番を待つ間は日陰にいられるのに。由美より先に弱音が出ていたら情けないぞ。呼吸のリズムを整え、バーを見据える。跳べる。イメージをしっかりと描き、構える。助走から踏み切り、完璧だ！背中がバーをこする。バーが揺れながら少しずつ動いている。そのまま、支柱からこぼれ落ちた。会場からどよめきが起こる。失敗してしまった。

二回目。一人目はまた時間をかけている。今度はそれを見越して、二人目も動いているから、リズムを狂わせるようなことはないだろう。時間ぎりぎりになり、助走に入る。やはり力強い踏み切り。今度は越えただろう。バーに触れることなくクリアする。先を越されてしまった。二人目は助走を何度もやり直している。一人目がクリアしたことで、緊張が増しているのだろう。あれでは跳べない。二回目は見なくてもわかる。ストレッチをしていると、バーが地面に

落ちた音が聞こえてきた。走り高跳びは、周りは関係ない。自分の最高のジャンプができれば、それでいい。周りが成功しようと、失敗しようと、それに心乱されてしまえば、自分の最高のジャンプはできない。由美が立ち上がっている。力が湧く。由美に見せるんだ。そのために必死で練習してきたんだ。今日のために。今、それを見せるんだ。全力を出し切るんだ。少し風が出てきた。風も計算して、助走でリズムに乗る。絶好の位置で踏み切る。体が浮かび上がる。背中にバーの感触がある。まずい、落ちる。体がマットに沈んだ直後、バーは地面にぶつかり、音を立てた。

ルール違反

三回目。もう後がない。ここで失敗したら終わってしまう。そんな訳にはいかない。一人目はもうクリアしているので二人目から。もう、完全に吞まれてしまっている。あれでは助走もままならない。自分の準備を整え、もう一度、バーを越えるイメージを描く。二人目は失敗した。順番がきた。勝負のジャンプだ。由美に目を向ける。我ながらよく見えるものだと思いつつ、思わず笑ってしまった。前払いはルール違反だよ、由美。でも、ありがとう。絶対跳べる。間違いない。助走から着地まで、全てがはつきりとイメージできる。地面を蹴って走り出す。助走から踏み切りへ。体が浮かぶ軌道も全てイメージの通り。バーには全く触れていない。成功だ。あと一人。一騎打ちだ。

最後の勝負

バーが上がる。大会記録と同じ高さになった。今は暫定二位だから、跳べなければ負けてしまう。相手と比べて、跳躍力は明らかに劣っている。技術で勝つしかない。暑さで疲労もピークだが、それは相手も同じ。自分のジャンプを崩さなければ勝機は十分ある。赤のユニフォームが汗で染まっている。一回目の跳躍はあっさりとスタートし、失敗した。あれは集中力が切れている。跳ぶことはできないだろう。この高さを跳べば勝ちだ。呼吸を整え、スタート位置に立つ。さっきより少し、風が強くなっている。生温い嫌な風だ。べつとりと染み付く。バーを見据え、助走を開始する。思ったよりスピードに乗れない。風の影響か。しまった。踏み切りに失敗し、そのままマットに沈んでしまった。

ありがとう

二回目。もう赤ユニフォームは見ない。失敗するのは目に見えて
いる。自分の準備に集中する。風の影響を考慮して、マーカーを少
しずらす。予想通り赤ユニフォームは失敗して、順番が回ってきた。
由美を見る。祈るように両手を握り、じっと、こちらを見ている。
暑いだろ？水分も摂らず、ずっと日の当たる場所で応援してくれて、
ありがとう。もう少しだからな。待っててくれ。絶対優勝するから。
地面を蹴る。マーカー通りの助走。絶妙の踏み切り。額を伝い、汗
が目に入る。邪魔だ！ほんの少し、バーに脚が当たり、落ちてしま
った。もう、後がない。

知ってるか？

三回目。完全に集中力を欠いてしまった赤ユニフォームは踏み切ることもできず、三回目を終えた。決着の時が来た。成功すれば優勝、失敗すれば二位。絶対に優勝するんだ。赤ユニフォームが失敗を祈るようにこちらを見ている。悪いけど、優勝は譲れない。大きく深呼吸をし、空を仰ぐ。暗くなっている。思わず笑みがこぼれる。由美には二度も助けてもらったな。赤ユニフォーム、知ってるか？今日は雨が降る。夢でお告げがあったんだ。ご利益抜群だぞ。そして、これから跳ぶ選手は雨の大会は大得意なんだ。気持ちの良い風が吹いてきた。霧のような雨が心地良い。汗が引いていく。集中力が研ぎ澄まされる。周りの音が消えていく。由美。ありがとう。優勝したら、すぐにそこへ行く。あと一回。見ていてくれ。ゆっくりと構える。地面を蹴って助走に入る。体が軽い。疲れなど全く感じない。絶好の踏み切り。会心のジャンプだ。バーに当たる訳がない。勝った。優勝だ。体がマットに沈む。バーはびくりともしない。

「やったあああああああ！」

やっとの想い

優勝が決まってすぐ、その後の跳躍を放棄した。優勝さえあれば、記録は関係ない。由美にすぐ会いたかった。由美が入退場門近くまで来てくれていた。散歩に誘い、二日前と同じ道を歩く。

「由美、ありがとう。やったぞ、俺」

「うん。見てたよ。格好良かった」

「キスは？」

「何バカなこと言ってるの」

「返事は？」

「そうやって改まって聞かれると恥ずかしいな」

「約束だろ」

「ルール違反したでしょ」

「おい。それは由美が勝手に。まあ、助かったんだけどさ」

「お告げも効いたでしょ」

「完璧だったよ。俺、思ったんだけどさ」

「何を？」

「いくら強い想いを示せても、それだけじゃ駄目なんだ。今日、由美に支えられてそう感じた。ずっと一緒にいたいなら、相手を支えることと同じくらい、支えてくれる相手を信じることも必要なんだ」

「やっとな気付きましたか」

「で、返事は？」

時間が止まる。由美の顔が、目の前にある。鼻と鼻が触れ合い、唇と唇が触れ合う。由美の閉じた瞳が目に映る。ゆっくりと、由美が離れて行く。ゆっくりと目を開き、微笑む。

「満足した？」

「伝わらなかつたから、もう一回」

「何バカなこと言ってるの」

やっとな、想いが何かわかった気がする。

「由美」

「出た。真剣モード」

「大きくなったら結婚しよう」

「ふふ、何それ。大きくなったらって」

「今なら言う資格があるような気がしたんだよ」

「そんな先のことはわかりません」

「進路がかかっているって言っただろ」

「あの時に結婚のことなんか考えてたの？」

「俺は真剣なんだ」

「本当かなあ。ずっと一緒にいるんだから、ゆっくり考えればいいよ」

「ずっと一緒にいられるかな？」

「いてくれないの？」

「いるよ。やっとここまで来られたんだ」

「私もね、ずっとそばにいたいよ」

雨が上がっている。暖かな日差しが眩しい。しばらくすれば、真夏の日差しに変わることだろう。

由美とは、きつとずっと一緒にいられる。夢じゃない。現実に、お告げがあつたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8033s/>

彼のゴール

2011年5月22日10時46分発行